

---

# ハリー・ポッターと邂逅(かいごう)

クロネコ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ハリー・ポッターと邂逅かいこう

### 【Nコード】

N4945P

### 【作者名】

クロネコ

### 【あらすじ】

初めての魔法の世界から戻ってきて数ヶ月 ハリーに 再び 不穏の影が……。

原作と映画を元に ちょっと 自分なりに考えたシナリオを用いた展開になっています。

第二弾の開幕ですッ！



## 第一章

ある夜 ある家では、1人の男が不適な笑みを浮かべていた。  
男の手の中には、古い本が 収まっているようだ。

「これで あの生意気な奴らを…… ツ！」男は高らかに笑いながら 叫ぶ。

暗闇の中で光る髪は、不気味なほど輝いている 月のように 見えた。

まるで 何かを予言するかのように 漆黒の闇は、深い。

「これさえあれば あの生意気な小僧も、殺す事が出来る！」

あのお方に、出来なかった 未来を、実現する事が出来るんだ」

まるで 絶対なる力を手に入れた喜びを、面白がっているようだ。

本も、その事に便乗しているかのように 暗黒を轟きながら 輝いているように見える。

「これで あの方を倒した 魔法使いが死ねば 恐れるものは、どこにもいない。

全ての力は我々に！！

今の時間を大切にしているがいい！

それが、貴様の最期の想い出になるのだからな！！

信頼する者から 死の刃を受け取るが良い！

地獄へ繋がる 光なき 闇の世界へ堕ちるがいいのだッ！」

男は、そう言いながら 笑っていた。

その手にしている 本からは、強い呪が込められているようだ。

これは、誰にも もう 止める事は出来ないのかもしれない。

自分の手を汚さずに 相手を確実に死へと導く 恐ろしい 呪だ。

男が崇めていた 魔法使いが、残した闇

ソレを使い

新たな歴史を作り出そうと考えた。

そして 最初に思いついたのが、ある魔法使いを殺す事。

息子から 何かと目障りだと思っていたところなのだ。

それは、自分と同じ道を進む事になるだろう 息子の為であり

自分にとつても 邪魔な枝は、切り落とさなければならぬ とう  
う 思いから。

「思いがけず コレが見つかって 嬉しい事はない！

これで…… 邪魔な穢れた血の者達も始末する事ができるのだから。  
全ては、純潔魔法使いの育成の為に！！

あの方が行った事を、我らが手にするのだ！

栄光なる 暗黒の時代へと導く為に！」

他の家族は出かけているので この会話を聞いていない。

けれど 扉の向こうから それを聞いている 生き物がいた。

ソレは、大きな目をもっと大きく見開き その様子を伺っているよ  
うだ。

どこか 悲しそうな表情を浮かべて 主人が行おうとしている計

画に 耳を立てている。

男は、その様子には気付いた様子がないようで ずっと 擦り寄る  
かのように 本を見つめているようだ。

「知らせなければ……！」

生き物は、小さく呟いて 屋敷を飛び出していった。

知らせる為であり 守る為に 魔法使いの元へと急いでいく。

どんなに、恨まれる事があつたとしても 構わない という 想  
いを胸に。

「あの方は、希望なのだ……」。

それを、それも簡単に 消させるわけにはいかない」

彼が住んでいる 場所へ ソレは、飛んでいった。

闇が、迫ってきている事を伝える為に。



ある 部屋の中では、男が険しい表情を浮かべて 本を読んでいた。

部屋の中には、様々な 資料が揃っており 人々の 情報が、収まられている。

教師もあれば 役人や一般人にたわいもない 子供のことで 事細かく 載せられていた。

その内容によつては、色々と助かることも少なくな 仲間との情報手段にも使えるものだ。

「偶然 あいつらが、掃除していて 発掘した 書物だと思っただけど……さ？」

全部 使えるものばかりだったんだよな？

まあ 整理するのは、骨が折れたけど。

にしても…… 本当に、詳しく 調べ上げているな？

ベンつてば 本当に、情報収集の天才だったんだ。

それを 引き継いでいるのも あの人の娘なんだし？

血の繋がりが っていうのは、怖い 怖い」男は、苦笑しながら 呟いた。

そして どこか 悲しそうな表情を浮かべてしまっているようだ。

「けど…… まさか とは、思うけど。

今回も 厄介なことになるかもしれない。

前は、失敗に終わったかもしれないけど 連中は、色々とするだろうし…… 邪魔もしてくるはずだ」

男は、訝しげな表情を浮かべて 溜息をつく。

その視線の先には、ある事項が、資料の中に 納まっている。

「多分…… この前の一件は、他のお仲間の耳にも入っているはずだ。

ずっと 沈黙を守っていた帝王が、突然 その影を明らかにした。

平和だと思われていた世界に 闇が出来たということは、動き出すキッカケになるかもしれないだし。

過去の資料からして 警戒するに越したことは、ないはずだ」男は、

資料と睨めっこを続けながら 呟いた。

資料の中には、前回の詳細も収められている。

いつの間にか 事件と遭遇してしまっていた 知人から話を聞きだし 先日 内容をまとめたばかりだった。

「前は、急なことでもあったから あまり 巻き込まないようにするつもりで協力してもらったけど そんなこと 言っていられないかもしれないな？」

彼女からの話によれば ちょっと 厄介なことになってしまつかもしれないらしいし」男は、息をつきながら 呟く。

その表情は、髭だらけの顔で わからないが 纏っている空気が、緊迫しきっている様子を伝えてきているようだ。

ふと 背後の扉がゆっくり と 音をたてながら 開く。

「あら 珍しいじゃない？」

アンタが、それを見ているだなんて………ね？

いつもは、他のみんなに 連絡を入れることが、主になってきているようだったけど？」女は、苦笑しながら 言った。

その言葉に 男は、息をつきながら 後ろに振り返る。

「まあ そっちの方も、ちゃんするって。

ちよつと 気になる事が、あつてね？」

去年の事もあるし………また 何かが、起こるかもしれないだろう？ 少しでも 力になれたら いいかな？ って 思ってたさ？」

過去の事件について 調べてみているんだ」

男は、そう言いながらも 手の中にあるものに 視線を走らせていつているようだ。

そんな男の様子に 女は、息をつきながら 部屋の中へと入ってくる。

「気になる事 って？

もしかして………何か 心当たりが、あるんじゃないでしょうね？ 去年は、私の知らないうちに あの子達に協力を要請していたでしょう？



今年は、そう 簡単に行動に移せると思わないことね？

「ほお〜ら…………吐いてしまった方が、楽なんじゃないかしら？」

女は、そう言いながら 男へと迫っていった。

そんな女の様子に 男は、後方へ下がっていつてしまう。

「別に 確証があるわけじゃないんだけど？」

それに そういう情報に関しては、姉さんの方が詳しいんじゃないの？

僕は、ただ 単に 前回のことからして…………連中が、何かを仕掛けてくるんじゃないか って 考えただけなんだから」男は、肩をすくめながら 言う。

「あつちからは、何の連絡もないわ？」

あるとすれば 体を大事にしろってところかしら？

私は、別に 命に関わる病気を持っているわけじゃないのにね？

まあ 他のみんなのように 戦力外にされているのは、悔しいかもしれないけど」女は、苦笑しながら 呟いた。

その言葉に 男は、悲しそうな表情を浮かべて 唇を噛み締めてしまっているようだ。

「あらら〜？ 苛めすぎちゃった？」

確かに 悔しい事は、多々 あるかもしれないけど…………別に 気にしているつもりはないわ？

それでも ちゃんと 割り切っているんですからね？

私は、自分の限度を知った上で 出来ることだけをするつもりなんだから」女は、呆れたように 溜息をつきながら、言った。

そんな女の様子に 男は、苦笑してしまっているようだ。

「本当に姉さんは、強いッ！」

というより…………僕の周りにいる 女性陣の強いこと。

この前 デイブに話があったから 家に行ったらさ…………？」

セーラに怒鳴り飛ばされているところで 僕は、その間 5つ子のベビーシッターをしていたんだから。

リーフも、何気に ドリーに頭が上がりないらしいからね？」男は、

息をつきながら 言う。

その言葉に 女は、訝しげな表情を浮かべてしまっているようだ。

「一応 事情は、話しておいたんでしょう？」

これから……… どれだけの危険が、この世界に 付きまとうてしま  
うのかを」

神妙な表情を浮かべて 女が言った言葉に 男も、険しい表情を  
浮かべて 頷いた。

「ああ 話した。

というか……… 話しても話さなくても 巻き込んでしまう可能性は、  
大だったんだけどね？」

暗黒の時代の頃を考えれば 連中は、家族や友人を 脅迫の人質と  
して 当たり前のように利用したんだから」男は、溜息をつきなが  
ら 言う。

その発言を聞いて 女の顔が、曇ったようだ。

「あの男が、完全に復活すれば……… また 大勢の命が犠牲になっ  
てしまうわ。

私は、もう 誰かが傷つく姿は、見たくない。

ただの自己満足にしか思われないかもしれないけど どうしても…  
……… ね？」

その日 折角の誕生日 だというのに ハリー・ポッターは、面白くない 1日を過ごしていた。

初めて知った 両親が過ごしたという ホグワーツ魔法学校での生活は、12年間 普通の子供として 過ごしていた ハリーにとって 窮屈でしかないのだ。

その上 ホグワーツに入る以前よりも ハリーにとっての自由は、制限されていてしまっている。

ハリーは、その状況に対して 尚更 心が沈んでしまう。

そんな少年の様子に気が付いているのか ダーズリー夫婦は、今までなかったくらいに ハリーに対しての扱いが、酷くなっているようだった。

ただ 従兄のダドリー・ダーズリーは、何かと励まそうとしてくれているようだ。

食事の時も、学校での友人について 色々と教えてくれる。

「フィリップっていう名前なんだけどさ？」

両親は、赤ん坊の時に亡くなったらしくて お姉さんと一緒に孤児院で育ったんだって。

将来の夢が、お菓子職人らしくて すつごく 料理が上手いんだ。  
クリスマスには、うちに遊びに来て ママの大好物だったもんだから…… 大歓迎されていたよ」

楽しそうに語る ダドリーに ハリーもその光景が思い浮かぶようだった。

けれど ダーズリー夫妻は、その様子にも 何かを疑う考えしか持ち合わせていないようだ。

「パパとママってば お前が魔法で 何か動物に変身させるんじゃないかって 心配で堪らないんじゃないか？」ダドリーは、苦笑しながら言う。

その言葉に ハリーは、呆れたように 溜息をついてしまった。

「確か ハグリットが、忠告していなかったっけ？」

ホグワーツに1度入学したら 17歳になるまで、学校外では魔法が使えない、ってさ？

僕のお母さんが、入っていた学校なんだから 知っているはずなのに。

変な偏見まで 持たれちゃっているようだしさ？」ハリーは、苦笑しながら言う。

「色んな事が、ありすぎて 忘れちゃっているんだよ。

家に泥棒は、入るし ママの知り合いからは、何度も何度も 連絡が、入っているみたいだったしさ？

それに 最後にや……………ハリーが、学校で 大怪我したらしい だもんな？

それ聞いた時……………顔を真っ青にさせていたよ？やっぱり、心配していたんだろうね？」ダドリーは、息をつきながら 呟いた。

「ああ……………連絡が、入っていたんだ？

僕らが 終業式の前に、仕出かした事。

道理で 駅まで迎えに来てくれた時……………居心地が悪い空気が漂っていたんだね？」ハリーは、肩をすくめながら 言う。

少年の言葉に ダドリーは、にんまり と笑って “ああ 聞いた” と 溜息を1つ。

「何か ハリーの両親を殺した、悪い奴が 実は、生きていたんだっけ？

それで そいつの崇拝者が、主人を蘇らせようとして 何とかの石 っていうのを手に入れよう と 奮闘していたんだろう？

で……………ハリー達は、それを阻止したんだっけ」ダドリーは、1つ1つ 思い出しながら、呟いた。

その言葉に ハリーは、驚きを隠せないような 表情を浮かべてしまっているようだ。

「何で そんな詳しく知っているの？」

確かに 間違っではないけど、話していないと思うんだけど？

それに 学校だって そんな簡単に 内容を話しわけがないもん」

ハリーは、目を見開きながら 言う。

その言葉に ダドリーは、苦笑を堪えているようだ。

「フィルが、知らせてくれたんだよ。

何かと わかりやすい、説明をしてくれていたけど 同じ知り合いらしい人に、その話をしている途中に見つかって 説教されていたな」

ダドリーは、そう呟きながら 思い出し笑いをしている。

ハリーは、従兄の話を聞き 驚きを隠せないでいた。

そんな少年の様子に ダドリーは、不思議そうな表情を浮かべてしまっているようだ。

「ハリーさ？

ホグワーツから、帰ってきてから 何か……ソワソワしていないか？

パパとママが、ヘドウィックを籠の中にも、閉じ込めちゃっているから 手紙は、届けられないんだろう？

ロンやハーマイオニーからも 手紙は、届いていないようだし」

ハリーは、ダドリーの言葉に 悲しそうな表情を浮かべてしまっている。

そんな従弟の様子に 戸惑いを隠せない表情を浮かべてしまっているらしい。

ハリーは、ダーズリーの家に戻ってから ずっと、ロンとハーマイオニーからの手紙を 待ち望んでいた。

けれど 何週間経っても ふくろうが窓を叩く事は、ない。

その様子に 落胆する日々を ハリーは、送っていたのだ。

ダドリーは、そんなハリーの様子に 心配そうな様子を見せてくれ

ているようだだったが、ダーズリー夫婦は、ハリーのそんな心境に付け入るかのように、嫌味を言うばかり。

「仕方ない、っていうことは、わかっているよ？」

だって……伯父さんと伯母さんにとったら、僕は、邪魔者でしかないんだ、ってことは、わかっているし。

現に……ホグワーツに戻ってから、前、以上に……敵戒態勢になっっているようだからさ？」ハリーは、溜息をつきながら言った。

「けど……何だか、異常なんだよな？」

特に、ママなんて……ノイローゼになっているような感じだしさ？ パパも、前にも増して……難しい顔をしちゃっているし。

何だか、嫌になってきちゃうんだよ」

ダドリーは、そう言いながら、溜息をついてしまっているようだ。「そういう、ダドリーだって。

こんな風に、話は、しに来ても、魔法に関しては、反対なんじゃないか」ハリーは、息をつきながら、呟く。

ハリーの言葉に、ダドリーは、呆れ返ったような表情に、なってしまっているようだ。

「まあな？」

だって……間違いで、魔法を掛けられちゃっても、困るしさ？ そういえば……フィリップが、クリスマスに来ていた時に、お前のお袋さんの話が、出たてぞ？」

従兄の言葉に、ハリーは、目を輝かせたような、雰囲気になる。

そんなハリーの様子に、ダドリーは「聞いても、面白くないのに」と、苦笑してしまっているようだ。

「えっとな？」

何でも、ママが、チョコレートが好物なの、知っているだろう？」ダドリーの言葉に、ハリーは「うん」と、疑問符を浮かべながら頷いた。

確かに、伯母のペチュニアは、部類のチョコレート好きなのだ。デザートなどには、必ず、チョコレートを、口に含んでいる姿を何

度も見る事が、出来ているのだから。

「ハリーのお母さんが、ホグワーツから戻ってきて 初めてのお土産だったのが、蛙の形をした チョコレートとだったらいい」

「ああ…………『蛙チョコレート』のことだね？」

実は、お土産に持って帰ろうかと思っただけど……………ホグワーツで友達になった子に 蛙が苦手な人には、お勧めできない品物だよって 言われたから 止めたんだけど」

ハリーの言葉に 従兄は、”それで正解だよ”と 苦笑気味。

「実は、その時に ママの幼馴染だった人が、ウツカリ 本物の蛙に変えたらいいんだ。」

ママは、蛙が苦手だから……………大騒ぎになって。

それ以来 ハリーのママからのお土産は、絶対 受け取らなくなっちゃったんだってさ」ダドリーは、息をつきながら 言う。

ハリーは、話の内容に 苦笑しながら、頷いているようだ。

その時 扉の外から、ノックの音が聞こえてくる。

「今日 とても 大事なお客様が来られる事になったの。」

だから……………2人共 出てらっしゃい？」ペチュニア・ダーズリー

は、どこか 神妙な表情を浮かべて 言う。

その言葉に ハリーとダドリーは、顔を見合わせて 頷いた。

2人の様子に ペチュニアは、訝しげな表情を浮かべてしまっているようだ。

「とにかく……………ダドリーちゃんは、よそ行きの服に着替えて？」

ハリーも その汚い服を、着替えなさい！

まるで ちゃんと 洗濯してあげていないようじゃないの！」

ペチュニアは、そう言い残して 忙しそうに 駆け出していった。その後ろ姿を見送って 2人の少年達は、苦笑しながら 顔を見合わせてしまっているようだ。

「多分 パパの上司が、来るんだよ。」

何か 出世するかもしれないんだって。

元々は、アントノヴァ先生の奥さんとの関わりで 今回の食事会が、

実現することになったただけだね？

パパは、あの性格だから……自分の能力のお陰だと思って 張り切っているんだ」ダドリーは、息をつきながら 呟いた。

そんな従兄の様子に ハリーは、不思議そうな表情を浮かべてしまっている。

「どうして……そんなに 憂鬱そうな顔をしているの？

伯父さんが出世するんなら もっと、誕生日プレゼントがいいものになるから……嬉しいがるんじゃない？」ハリーは、首を傾げながら 言った。

その言葉に ダドリーは、悲しそうな表情を浮かべて 溜息をついてしまっているようだ。

「だって……何だか いい感じは、しないんだよね？」

今のままでも 充分、幸せなんだし。

まあ 不満は、あるかもしれないけど。

それが、当たり前になってきている分……このままで いいような 気がするんだ。

何かが変わっていくと 全部 おかしくなっちゃう気がするさ？

環境も 人間関係も……」ダドリーは、肩をすくめながら 言う。ハリーは、そんな従兄の様に 思わず、苦笑してしまった。

ダドリーは、ハリーのそんな様子に どこか 訝しげな表情を浮かべてしまっているようだ。

「まあ 今日、元々 コンラッドが来る予定にもなっていたんだし 悪いこと続きじゃないだろう？

その後は、ソフィーが料理をいっぱい持って 遊びに来るらしい……バチンッ……」

その時 窓の外で 何かが、盛大な音を立てて 落ちてきたらしい。



## 第二章

振り返ると 窓の外には、大きな目の不思議な生き物が、その場に立っていた。

その姿を確認して ハリーとダドリーは、驚きを隠せないままだ。窓の外にいる ソレは、2人のそんな様子に 神妙な表情を浮かべたまま 部屋の中へと入ってくる。

「ハリー・ポッター……………」

大きな目をした ソレは、ゆっくりとした 動作で部屋の中に入ってきて 小さな口を開く。

ハリーは、知りもしない 生き物に 自分の名前を呼ばれた事に対して 驚きを隠せなかった。

ダドリーも、近づいてきている生き物に 訝しげな表情を浮かべてしまっているようだ。

「ドビーめは、ずっと 貴方様にお目に掛かりたかったッ！」

ハリーとダドリーは、壁伝いに 机の方ににじり寄って 崩れるようにして 椅子に腰を下ろす。

眼鏡を掛けた少年の近くの椅子の側には、鳥籠の中で眠る ヘドウィッグが。

この家の中で異質な存在のカレは、ゆっくりとした 動作で ”ご紹介が遅れました” と 深々と頭を下げた。

「屋敷しもべのドビー」と 申します」

ドビーの様に ハリーは、戸惑いを隠せない表情を浮かべて ダ

ドリーと顔を見合わせるしかないようだ。

この光景を伯母夫婦に見られでもしたら 今以上に とんでもない事になってしまうだろう。

「屋敷しもべ って 魔法界の妖精？」

ハリーの言葉に ドビーは“左様で ございます”と お辞儀した。ダドリーも、驚きを隠せないまま その様子を、見守っているようだ。

「とにかく 立ち話もなんだし……座って？」

その発言を聞いて ドビーは、目を大きく見開き 突然 その場に蹲るようにして 泣き出した。

ハリーとダドリーは、その大袈裟な泣き方に ハラハラだ。

「す 座ってだなんてッ！

一度……誰にも……！」

ダドリーは、目をパチクリさせながら ”頭 大丈夫か？”と 本気で心配している。

「今まで 誰かに 椅子を勧められたりとか しなかった？

普通なら ありえない事じゃないか」

その問いかけに 妖精は、”しもべ妖精は、奴隷ですから”と 悲しげな顔になった。

「中には、対等に扱ってくださる 魔法使いや魔女も存在しております。

けれど それは、魔法界で 異質な存在と位置づけられてしまう」  
そう言い終えると ドビーは、突然 立ち上がって 前触れもなしに 窓ガラスに向かって 自分の頭を打ちつけ始めたのだから  
ハリーとダドリーは、呆気にとられてしまったようだ。

「ドビーは悪い子ッ！

ドビーは悪い子！」

2人の少年は、下の様子に神経を集中させながら 何とか ベットに座らせる。

眠っていた ヘドウィッグは、その騒ぎに目を覚まして 鳥籠の格

子を羽で激しく打ちつけ始めてしまったらしい。

「ドビーは、自分で お仕置きをしなければならないのです。自分がお仕えしている ご主人様やその家族の悪口を言ってはならない。」

ドビーは、屋敷しもべ妖精…………… 1つの屋敷 1つの家族にお仕えする運命」

独り言のような発言に ハリーは、首を傾げた。

「君が使えている魔法使いは、君がここに来たこと……………知っているの？」

もしかして 命令されて？」

興味がそそられた事を聞いただけなのに 妖精は、世にも恐ろしいことを聞かれたかのような顔だ。

「ドビーめは、こうして お目に掛かりに参りましたこと 厳しくお仕置きされなければならぬのです。」

お屋敷に戻りましたら オープンの蓋で 量耳をバチンと しなければならぬのです。

ご主人様に知られてしまえば それこそ……………」

「だけど そんな風に お仕置きしていたら それこそ そのご主人様に 気が付かれちゃうんじゃないのか？」ダドリーは、暴れている ヘドウィッグを、猫じゃらしでからかいながら 呟く。

従兄の質問に ドビーは、”大丈夫です”と 自信満々。

「ドビーめは、いつも 何だかんだと自分でお仕置きをしていないといけないのです。」

以前は、お嬢様がお止めに入られておりましたが 今は、それもなく ご主人様は、勝手に お仕置きさせているのです。

時々 お仕置きが足りないと おっしゃられまして……………」

「どうして 家出しないの？」

普通なら 逃げてもおかしくないと 思うんだけど？」

ハリーは、心の底から 目の前にいる 妖精が、可哀想でならない。自分よりも、蔑まれた存在がいただなんて……………。

「屋敷しもべ妖精は、ご主人様自身の手で 開放されなければ 自由にはなれないのです。」

我々は、魔法使いの財産として 1つの屋敷なきではならない 家具という名の奴隷。

ご主人様は、ドビーめを自由にするはずがありません……………知りすぎているのです」

「僕に出来ることが、あればいいんだけど……………」

ハリーは、そう言った途端 本能的に 『しまった』と 思った。

ドビーは、またしても 感謝の雨という名の涙を流しながら 泣き始めたのだ。

「ハリー・ポッターが、『何か出来ないか』と ドビーめに聞いて下さったッ！

貴方は、偉大な方だと聞いておりましたが あの方と同じく こんにちも 優しい方だったなんて……………ッ！

しかも 名前を呼んではいけないあの人に 勝ったことをおっしゃられないだんて 何て 謙虚な方ッ！」

オンオン と 泣いている ドビーに ハリーとダドリーは、疲れ果ててしまう。

階下から 呼ぶ声が聞こえ 従兄は、少しでも 下の注意を逸らすと言いながら 部屋を後にしたらしい。

「ドビーめは、知っています。」

ハリー・ポッターが、闇の帝王と4週間前に 2度目の対決をし

またしても(……………) 逃れた と。

貴方様は、何度も危機を切り抜けられる 勇猛果敢な方ッ！

ドビーは、この度 貴方様をお守りする為……………警告しに参りました！

ホグワーツには、行かないで下さい！」

一瞬 部屋の中に静けさが広がった。

「命に関わる 危険が、ホグワーツで起こってしまうのです」

ハリーは、我に返ると “そんなの無理だッ！”と 声を張り上げ

たが　すぐに　囁く声になったようだ。

「僕は、戻らないといけないよ。」

だって　9月1日に新学期が始まるんだから。

僕にとつては、ホグワーツほど心休まる場所が無い。

あそこでは、僕の知らないことを知ることが出来る。

どうして……そんな事を言うの？」

「理由は、申し上げられませんが　恐ろしい罫が、待ち受けているのです」

真剣な言葉に対し　眼鏡を掛けた少年は、首を振る。

「どんなに危険なことがあるにしても　僕は、ホグワーツに戻る。

ここが死ぬほど屈辱的な場所というわけじゃないけど　僕にとつての居場所は、ホグワーツなんだと思っているんだ。

あそこには、友達もいる」

「手紙もくれないなのですか？」ドビーは、真剣な表情を浮かべて言う。

その言葉に　ハリーは、驚きを隠せず　息を呑む。

ドビーという　屋敷しもべ妖精は、そんな少年の様子を　食い入るように、見つめている。

「どうして　知っているの？」

僕は、使い魔が籠の中に　閉じ込められてしまっているから、手紙は出せないけど……2人からは、それに対する　手紙も来ないのに「ハリーは、訝しげな表情を浮かべて　ドビーを見つめながら、呟いた。

ドビーは、そんな2人の様子に　肩をすくめながら、指を鳴らしたようだ。

すると　妖精の手の中には、何通もの　封筒が出てくる。

それを見つめて　ハリーは、驚きを隠せないままで　目を大きく見開いてしまっているようだ。

ドビーが差し出してきたものは、ロンとハーマイオニーが　自分に宛ててくれていた　手紙の数々だったのだから。

「何で……僕の友達の手紙を 隠す必要がある?!

僕は、ずっと 手紙を待っていたのにッ!」

ハリーは、悲しそうな表情を浮かべて 手紙を取り戻そうとしたようだ。

けれど 妖精は、その瞬間を察知していたのか 寸前で、ベットから飛び退いてしまう。

「ホグワーツに戻らないとドビーと約束したら 手紙を差し上げます」

ドビーの言葉に 少年は“嫌だッ!”と 怒っている。

「それは、僕の手紙から送られた 大切な手紙なんだ!」

その答えに 妖精は“そうですか”と 哀しげな表情を浮かべた。

「でしたら ドビーは、こうするしかありません」

次の瞬間 屋敷しもべ妖精は、矢のようにドアに飛びつき 階段を全速力で下りていってしまったようだ。

その頃 ウィーズリー家では、ロナルド・ウィーズリーが訝しげな表情を浮かべて 窓を見つめていた。

赤毛の少年のそんな様子に 他の家族は、顔を見合わせて 溜息をつくばかりだ。

「いつまで そんな風に、難しい顔をしているんだ。

さっき エロールが、手紙を持っていったばかりだろう？」パーシ

ー・ウィーズリーは、息をつきながら 言う。

兄の言葉に ロンは、肩をすくめてしまっているようだ。

「手紙書く って 約束したのに…… ハリーから 全然 返事が来ないんだ」ロンは、悲しそうな表情を浮かべて 言う。

そんな弟の様子に パーシーは、困惑したように 他のメンバーに、視線を走らせる。

他の家族も、戸惑いを隠せないまま 顔を見合わせてしまっているようだ。

どこか 心配を隠せないような 表情を浮かべて ロンを見つめている。

その時 窓の外から、ふくろうが鳴く声が……。

ロンは、その鳴き声に 飛び上がるかのように、飛び出した。そんな弟の様子に 残されたメンバーは、息をつきながら 苦笑してしまっているようだ。

「けどさ…… おかしくないか？」

赤毛の青年の言葉に 一同の視線が、ウィーズリー家の長男：ビル・ウィーズリーに 集中した。

「1ヶ月も 連絡が取れないなんて。

4週間前の出来事のこととは、誰もが周知のことなんだろう？ 万が一……」

ビルは、途中で 言葉を切ってしまったようだ。

その視線の先には、険しい顔の母親の姿が……。

しばらくして 赤毛ののっぽな少年が、肩を落としながら 戻ってきた。

「ロン…… ハリー・ポッターからの手紙の返事が来たんじゃないかな？」

ウィーズリー家の末っ子長女の ジネブラ・ウィーズリーは、不思議そうな顔。

その言葉に ロンは、悲しそうな表情を浮かべてしまっているようだ。

「ハーマイオニーから。

マグルの方法で 手紙を送っても 返事が来ないらしい」ロンは、神妙な表情を浮かべて 言う。

赤毛の少年の言葉に 一同は、驚きを隠せない様子で 顔を見合わせた。



「まあまあ それでは？」

彼方方ご夫婦は、うちの顧問弁護士をしている コンラッド・モーガンや妻の友人のソフィア・スチュワートの古い友人だったんですか。

これは、驚きましたな？

彼は、私が通っていた大学の同期で その才能を買い 顧問弁護士を頼んだのですよ。

まさか このような共通の友人がいるとは「バーノン・ダーズリーは、意外そうな顔で 呟いた。

その言葉に 訪問者の夫婦は、微笑んだ。

「ええ そうなんですよ。

学年は、違ったんですけどね？

Mr・モーガンやMrs・とは、幾度となく 校内でも顔を合わせていました。

彼らは、学校の中ではある意味目立った存在でしてね？

色々な意味で 他の学年の生徒からも信頼されていたんですよ」

「コンラッド ソフィーはお元気？」

先日 懐かしい手紙が届きまして 昔のことを思い出しましたわ？ 家にあった写真のほとんどは、あの子の為に 差上げたのよ。

貴方の所にも、彼が訪れたのではなくて？

お元気にしているのかしらね？」

その質問に 向かいのソファに腰を下ろしている顔立ちの整っているきつちりとした服装の男は“元気です”と 微笑む。

「もしかしたら、メイソン夫婦の訪問中に やって来るかもしれま

せんよ。

その頃には、仕事のお話が終わっていたいただいとありがたいのですが。

ソフィアが、ここに来てしまうと 商談どころじゃなくなってしまう気がするのですね？

あれで、あの仕事が続けられるのが嘘のようです。

あちらに ご迷惑をかけていなければいいのですが……」

苦笑気味にな言葉に リビングにいる面々は、笑みをこぼす。

ダドリーは、少し離れた席で 何度も、上の天井を見上げながら 余所行きの服に身を包み、ソワソワしていた。

上の部屋のハリーとドビーのことが、心配で溜まらないのだ。

「あら 息子さんは、何やら 気になっていることがあるようですね？」

メイソン夫人は、ニツコリと微笑みながら ダーズリー家の子供に視線を向ける。

自分に声を掛けられていることに気が付き ダドリーは、肩をすくめてしまう。

「いやあ 気になさらないで下さい。

息子は、まだ私の行っている事業に興味がないようですね？

妻の作った傑作のケーキが、気になって仕方がないのでしょ」

ダーズリー氏の発言に メイソン夫妻は、朗らかに微笑む。

「ところで 夫人の妹さんの忘れ形見の息子さんは、留守なのですか？

何だったら 一緒に 食事をしたいものなのだが？」メイソン氏は、部屋の中を見回しながら 呟いた。

その言葉を受けて ダーズリー夫妻は、固まってしまうようだ。

「いいいえ ちょっと 酷く精神不安定な部分があるんですよ。

知らない人に会うと 気が動転してしまう部分があります。

あまり粗相をさせないために 今は、自分の部屋に下がらせており

ます」

バーノンは、冷や汗を掻きながら 取り繕う。

ペチュニアは、それを聞きながら 唇を噛み締める。

メイソン夫妻は、それを聞いて どこか眉間に皺が寄ってしまっているらしい。

ふと コンラッドは、自分の目を疑った。

何と 自分の座っている位置から見える台所で 山盛りのホイップクリームとスマイレの砂糖漬けされたデザートが、天井近くで浮遊しているのだ。

弁護士である友人の視線に気が付いたのか バーノンも、そこに視線を向ける。

すると ケーキは、独りでに浮かんだまま進み出てきた。

そして、部屋の扉が開くと同時に……ガシャンッ！と 心臓が止まるような音を立てて 床に落ちたのだ。

皿は、割れ その音に入り混じるかのように、微かにパチンと音と共に 何かが姿を消す。

傑作だったケーキは、ちょうどダーズリー家を訪問した人物の頭のとっぺんから足の先までグチャグチャになってしまう。

ハリーは、リビングと台所を繋ぐ扉の前で ショックで硬直してしまっていた。

「ソフィアッ！」

大丈夫か？怪我は？」

第一声を上げたのは、コンラッドだ。

名を呼ばれた女性は、辛うじて見えている顔から溜息をつき 顔中にこびりついているホイップクリームを拭う。

皿の破片などは、幸いにも 降り注いでいた物の、怪我の要因になっっていないかったらしい。

その様子を確認して 一同は、安堵の息を漏らす。

ハリーは、目だけで射殺されるのではないかと思しながら 伯父の殺気の籠った視線とモップを受け取り、キッチンの床を擦り始める

ことに。

「怪我はないけど ケーキが、台無しになってしまったわ？  
もしかして…… 手品の練習でも、していたの？」

確かに コレは、余興としちゃ 楽しいかもしれないけど…… ちよつと いただけないわ？

実行するのなら ちゃんと 練習を事前に行っておかないと」

どこか悪戯っぽくジョークをかましたペチュニアの友人：ソフィア・スチュワートの一言によつて その場は、何とか取り繕われた。

「ソフィア…… 貴女は、着替えないと。

本当にごめんなさいね？

シャワー室は、あつちよ？

服も、用意するから……」

ペチュニアは、本当に心から申し訳なさそうに思いながら 階段を駆け上がつて、何やら 普段着ているものとは印層の全く違っている 品な服を手而降りてきたようだ。

「ありがとう。

まさか、わざわざ人の家に来て シャワーを借りることになってしまつたなんてね？」 少し赤の入り混じつた髪色をしている女性は、苦笑しながら クリームまみれのまま、リビングから足を運ぶ。

その後 先ほどのハプニングが、嘘のように 商談は、いい方向に進んでいく。

一番の貢献者といえば やはり、バーノン野会社の顧問弁護士を務めている 手腕のコンラッドのお陰だろう。

だが それも 何とか商談成立の可能性が出てきて 食後のミントチョコの入った箱をみんなに回していた時まで。

何と 巨大なふくろうが1羽 中庭の窓から舞い降りて 皆が囲んでいたテーブルの上に手紙を落としたのだから。

メイソン夫妻は、何とも思っていなかったようなのに ダーズリー夫妻は、さらに緊張の糸が切れたようにパニックになってしまい 商談は、成立しないまま 夫妻に帰ってもらうことになってしまう。

あまり 長居しない方がいいと踏んだのか コンラッドやソフィアも家を後にしてしまったらしい。

手紙には、ハリーにとって 最悪の内容が記されていた。

## ポッター殿

今夕 9時12分、貴殿の住居において『浮遊術』が使われたとの情報を受け取りました。

ご存知のように 卒業前の未成年魔法使いは、学校の外において呪文を行使することが許されておりません。貴殿が再び呪文を行使すれば 退学処分となる可能性があります。（未成年魔法使いに対する妥当な制限に関する1875年法、C項）

念のため、非魔法社会の者に<sup>マグル</sup>気づかれる危険性のある魔法行為は、国際魔法戦士連盟機密事項保持法第13条の重大な違反となります。

休暇を楽しまれるよう！

敬具

## 魔法省

魔法不適正取締り局 マファルダ・ホップカーク

その手紙を読み終えて、顔を上げてみると バーノンは、どこか虚ろな顔をして ニヤニヤ。

「わしは、小僧 お前を閉じ込めるッ！

お前は、あの学校に戻れない

戻ろうとして魔法で逃げ出そうとすれば この手紙を送ってきた連中は、お前を退校にするんだらう？」

そう言い放って ダーズリー伯父さんは、ハリーを2階へと引き摺っていったようだ。

ダドリーとペチュニアは、そんな父（夫）の様子に 驚きを隠せない。

「パパ 一体 どうしちゃったんだろう？」

別に 今までに、こんな今まで異常なことをしたことがないだろう？

メイソンさん達だって 変に思っている風もなかったんだから。

次の約束だって 取り付けていたみたいだし」

息子の呟きに 母は、不安を隠せない。

「まるで 誰かに操られているようだわ？」

消え入るようなペチュニアの囁きに ダドリーは、驚いたように 目を見開く。

けれど 息子の視線を感じて 母親は、何事も無かったかのように 後片付けをする為 ソクサとリビングを後にしてしまう。

「一体 どうなっているんだ？」

まさか あの变てこな妖精が、あんなことを仕出かしたんじゃない だろうな？

だって、ハリーに警告しに来ていた。

ホグワーツへ戻るなつて。

まさか………その為に あんなフザけたことをやってのけたんじゃない 1人残されたダドリーは、思案するように 首を捻った。

「それに あのママの言葉だ。

操られているようつて 誰かが、魔法で ハリーを閉じ込める為に

パパに何かをした ってことなのか？」

その後 バーノンは、狂った行動に出た。

何と 翌朝に人を雇い 部屋の窓に鉄格子をはめ込み 部屋の唯

一の出入り口である扉に 『餌差し入れ口』を取り付け 1日3回

わずかな食事を運び 朝と夕にトイレに部屋を出してもらえるに

しても それ以外 部屋に閉じ込められる結果となってしまうたの

だから。

しかも 何か警戒されてしまっているのか ハリーとダドリーは、その閉ざされた扉の前で 2人だけで話すことも許されないのだ。

「どうしても おかしいわ？」

だつて……あのハリーがよ？！

ロンなら ともかく ハリーが、手紙の返事を返してくれないはず  
ないわ？！」栗色の髪をした少女は、訝しげな表情を浮かべて 言  
った。

娘の言葉に 両親は、困惑を隠せない様子で 顔を見合わせてしま  
っているようだ。

その様子に ハーマイオニー・グレンジャーは、苦笑しながら 両  
親を見る。

「何度も 手紙を送っているのだけど 全然 返事が返ってこない  
の。」

ロンにも その事について、さつき ふくろうを送ったところ。

ハリーと音信不通になるだなんて 思いもしなかった。

ホグワーツにいた頃じゃ そんな心配いらなかったのに「ハーマイ  
オニーは、悲しそうな表情を浮かべて 呟いた。

「他のお友達には、その事について 聞いてみたの？」

母は、心配そうな表情を浮かべて 娘を見つめているようだ。

ハーマイオニーは、母の言葉に 悲しそうな表情を浮かべて、首を  
振る。

「同じ ロンドン市内に住む 友達には、色々と 聞いてはみたん  
だけど」ハーマイオニーは、小さく 溜息をつきながら、言った。  
そんな娘の様子に 父親は、心配そうな表情を浮かべてしまってい  
る。

「確か 郵便でも、送ったんだろう？」

けど 返事は、来なかったのかい？

早かったら そろそろ 返事が来ても おかしくないだろうし」

父の言葉に ハーマイオニーは、神妙な表情を浮かべて 頷いた。

「まだ 来ていないの。」

けど ふくろうで、連絡が取れないんだもの……… 望みは、ないかもしれないわ？

明日は、マリーとアルと一緒に 住所を頼りに ハリーの家の近くまで 行こうかと思っているの。

もしかしたら お家で、何かが あったのかもしれないでしょう？  
従兄の方は キングズ・クロスでもしゃべって 良さそうだったけど  
伯母さん夫婦は、最低だったもの」

ハーマイオニーは、そう言いながら 心配そうな表情を浮かべてしまっているらしい。

そんな娘の様子に 両親は、神妙な表情を浮かべて 顔を見合わせ  
てしまっているようだ。

「伯母さんの方は、血が繋がっているはずなのに………ッ！」ハー  
マイオニーは、唇を噛み締めながら 呟く。

少女の手は、力いっぱい テーブルを、叩きつけている。

そんな娘の様子に 両親は、顔を見合わせてしまっていた。

「でも ハーマイオニー？

どんなにキツイ言い方をしているからといって、酷い って 決め  
付けてしまう というのも、どうかしら？

心配で堪らない っていう 気持ちも、あるかもしれないのよ？

それに ハリーは、校長先生がお決めになった 家に 預けられた  
んでしょう？

だったら 何か、理由があるはずよ？」

母は、苦笑しながら そう言って ハーマイオニーの手を優しく  
包み込んだ。

その言葉に 父も、神妙な表情を浮かべて 頷いている。

「血の繋がりは、色々な意味で 大切かもしれない。」



でも 生みの親より 育ての親 っていう 言葉もあるんだ。  
たとえ 季は繋がっていなくても その絆は、計り知れない場合  
だってある。

現に ママは、実の両親を知らないけれど 育ててくれた夫妻は、  
優しくも 厳しくも 育ててくれたんだ。

ハリーの伯母さん夫婦は、気持ちと裏腹なくらいに 天邪鬼になっ  
てしまうかもしれない。

例えば その人を、想えばこそ でね？

その ハリーの伯父さんと伯母さんは、そうだったり するんじゃないかな？」

父は、そう言いながら ウィンクしてくる。

ハーマイオニーは、両親の言葉に “まさか ありえないわ？” と  
訝しげな表情を浮かべてしまっているようだ。

娘のそんな様子に 両親は、顔を見合わせて 溜息をついた。

その時 インターホンの音が、鳴り響いた。

グレンジャー家の面々は、不思議そうな表情を浮かべて 顔を見合  
わせる。

「一体 誰かしら？こんな時間に」

ハーマイオニーは、訝しげな表情を浮かべて 時計を見つめた。  
時刻は、もう 10時を過ぎようとしている。

すると 扉の方から、母の 嬉しそうな声が聞こえてきた。

「まあ 久しぶりじゃない！！」

全然 遊びに来なくなっちゃったんだから。

ほら 上がって、上がって！

今 主人と娘もいるのよ？

何年振りかしら？

何だか 懐かしいわ？

あの頃に 戻ったみたいで。

それに ちよつと 聞きたいことがあるのよ

どうやら 母の知り合いが、近くまで来たから ということだ

訪問してきたようだ。

けれど 訪問者は、何か用事があるらしく 母と息を潜めて 会話をしている。

その様子に ハーマイオニーは、不思議そうな表情を浮かべて 事情を知っているであろう 父を見つめた。

父は、娘の視線に気が付き ニツコリと 微笑んだ。

「ハーマイオニーも赤ん坊の頃 会っているはずだよ？」

覚えていないかもしれないけど よく 遊んでもらっていたしね？  
もしかしたら 向こうで 顔を合わせているかもしれないけれど……

……」

父の言葉に ハーマイオニーは、驚いたような顔をしているが 思い当たる節を探そうと 首を捻っているようだ。

「あんまり 覚えていないわ？」

それに、ママの友達 って 今まで あまり 会った事がないんだもの。

写真だって 残っていないでしょう？

もしかして メイベル伯母様 繋がりが？」ハーマイオニーは、神妙な表情を浮かべて 呟いた。

そんな娘のその言葉に 父親は、苦笑しながら 見守っているようだ。

しばらくすると 母親も、思わしくない顔で 戻ってきていた。

妻の様子に 夫は、神妙な表情になり 視線を、娘へと走らせる。

「ハーマイオニー？」

そろそろ 寝ないと いけないんじゃないか？

明日は、その子の家まで、行くんだろう？」父は、ニツコリと微笑みながら 言った。

その言葉に ハーマイオニーは、訝しげな表情を浮かべてしまうが

” 明日、寝坊してしまうわよ？” という母の言葉に 自分の部屋へと戻っていく。

グレンジャー夫婦は、そんな娘の背中を見つめ 神妙な表情を浮か

べて、顔を見合わせていた。

「至急 お義姉様夫妻に連絡を取らないといけなくなったわ？」  
妻の真剣な言葉に 夫は、眉根を寄せたようだ。

「けど さっきの話、どう思う？」

やっぱり 予想通り って 言うのかな？」女は、神妙な表情を浮かべて 呟いた。

その言葉に 男は、訝しげな表情を浮かべてしまっているようだ。

「間違いない だろうな？」

まあ そうなっている間は、間違いなく 安全だという事は、保障されているだろうよ？

なんたつて 認識されていない、呪いなんだから。

あいつらからの話を聞いた限りでは、イマイチ 理解に苦しんだが やっと 話が繋がったわけだ」男は、呆れ返った表情を浮かべて 呟いた。

女は、そんな男の様子に 小さく息をつく。

「その言い方 って 他人事のようだけど？」

確かに その通りかもしれないけど。

もっと 言葉を探しておかないと 前みたいに 冷たい って 言われちゃうよ？」女は、真剣な表情を浮かべて 言った。

その言葉に 男は、呆気に取られてしまっているようだが すぐに 吹き出してしまう。

男の反応に 女は、訝しげな表情を浮かべて 仁王立ちしている。

「言われなくなつて、そんな事 わかっているさ。

まあ 心配する 理由が、揃っている以上 様子見をした方が良いのは、確かだろうな？

このまま 行つてみるか？

ついでに あいつらのところにも、寄ろうか。

変な厄介ごとを拾う事に なってしまいかもしれないかな？」

男は、そう言いながら どこか 面倒くさそうな表情を浮かべているようだ。

そんな男の様子に 女は、“真面目に、やらないと”と 険しい表情を浮かべていた。

女の視線に 男は、苦笑しながら 肩をすくめている。

「ちゃんと やるべきことは、理解しているさ。

勿論 今回の山に ついてもな？」

今回は、行動を慎重にすべきだろう。

下手すれば 前の時のように 犠牲者が出る。

不安の種は、一掃しないと」男は、訝しげな表情を浮かべて 呟いた。

「でしようね？」

こつちだつて そんなものが、いつまでも 残っていたら 足元を 掬われちゃう」女は、苦笑しながら 言う。

その言葉に 男は、神妙な表情を浮かべてしまっているようだ。

「だが あの子にとって 相当 堪える事なんじゃないか？今回の事なんて 特に……どんな罠が、待っているのか 定かじゃない」男は、どこか 悲しそうな表情を浮かべて、呟いた。

そんな男の言葉に 女も、息をつきながら 頷いている。

「かもしれない。

でも 本人だつて、わかっているはずだから 言葉だけじゃない 覚悟も そろそろ 必要に なってくるんじゃないかな？」

多分 私達にとつても 心を改める いい機会になるかもしれない」

女は、真剣な表情を浮かべて 呟いた。

ふと 頭に 何かが、落ちてくる。

その触れ具合に 女は、訝しげな表情を浮かべて 空を見上げた。

「どうかしたのか？」

男は、不思議そうな表情を浮かべて 女の顔を覗きこんでいるようだ。

「今 頭の上に ジュースが零れてきたの。

しかも これは、かぼちゃジュースだわ。

普通のマグル家庭じゃ 作らない飲み物なんだけど」

女は、呆れた表情を浮かべて 髪の毛にこびり付いてしまった、ジュースを ハンカチを取り出して、ふき取っていく。

「予測不可能なのは、連中だけじゃない ってわけだ」

男は、その言葉に溜息をつきながら 空に浮かぶ 影を 見つめていた。

少し時間を遡って…………。

ロン+ウィーズリーの双子は、夜空をドライブしていた。

「ねえ！！」

ハリーの家まで 後 どれくらいなんだ？

ハーマイオニーが、念の為に っ て 住所を覚えてくれていたんだろ？」「赤毛の少年が、ハンドルを握り締めながら 大声で 叫んだ。

フレッドの言葉に ロンは、水筒を片手に ポケットから メモを取り出す。

「もう少しで ハリーが預けられている ダーズリー家に着くはず。大きな家に 広い庭があるんだって。

けど ハリーが言うには、魔法使いの家に比べたら 負けるだろうってさ？」ロンは、苦笑しながら 言った。

弟のその言葉に フレッドやジョージも、顔を見合わせて 吹き出してしまっているようだ。

「でも、すごいな？」

まさか 箒以外で、飛ぶ事になるだなんてさ？

それに、これなら 未成年者の規則には、捕まらないし」ロンは、興奮気味な様子で 真下の街並みを見つめながら 呟いた。

「おいおい………… ちゃんと \*まっ て置けよ？

あんまり 身体を乗り出さないでさ？

この車を使って ハリーを迎えに行く っ てだけでも ママのお冠は、目に見えている事なんだから。その上 怪我人が出てみるよ。食事抜きだけじゃ 済まされないかもしれない」ジョージは、真剣

な表情を浮かべて 言い放つ。

そんな兄の言葉に ロンは、思わず 手に持っていた水筒の中身を、零してしまった。

「うっわぁ……………どうしようッ！」

ママ特製の かぼちゃジュースが……！」

赤毛の弟の言葉に フレッドとジョージは、溜息をつきながら “何 やっているんだよ” と 呆れ返ってしまっているようだ。

「ハリー……………もしかしたら、伯父さんと伯母さんに 酷い目に合  
わされているかもしれないから 持ってきたのに……」赤毛の少年は、  
今にも 泣き出しそうな表情を浮かべて 呟く。

その言葉に フレッドとジョージは、顔を見合わせて 溜息をつい  
てしまっているようだ。

「……なってしまった事は、仕方がないって」「双子は、息をつきな  
がら 言う。

ロンは、そんな兄 2人の言葉に 悲しそうな表情を浮かべて  
零れ落ちていく 液体を、見つめていた。

ウィーズリーの3人は、家族が寝静まるのを確認してから ハリー  
を迎えに行く という 計画を立てたのだ。

幸い ウィーズリーの父が以前 魔法をかけていた 車のことを思  
い出し 向かっている。

車には、マグルに見つからないよう 保護の魔法がかけられている  
らしく 空を飛ぶ 鳥達でさえ 存在に気が付いてない。

「とにかく 突っ走るぞ？」

さっさと ハリーを迎えに行つて……………家に戻るんだから。

ママの巡回時間までには、戻らないと……………な？」

フレッドは、そう言いながら ハンドルを、全開に きっている。

その表情は、真剣そのものになっているようだ。

「ってかさ？」

ジニーの奴 ハリーがいることに気が付いたら……………飛び上がるん  
じゃないか？



何かと 休み中 ハリーの話を 聞きたがっていたし。

昔から ハリーの熱狂的なファンだ。

実は、ハリーに送った セーターは、ジニーがママに頼み込んで 9月から 編んだらしいぞ？」ジョージは、ニヤニヤしながら 言った。

その言葉に ロンは、少し 訝しげな表情を浮かべてしまっている ようだ。

「ジニーは、ただ ハリーの外側の話で 大騒ぎしているだけだろう？」

僕だって 最初は、そう思っていたかもしれないけどさ？

ハリーは、そんな風に 勝手に騒がれるの嫌がっているのに「ロンは、肩をすくめながら 呟く。

ロンの言葉に ウィーズリーの双子は、顔を見合わせて 吹き出してしまっているようだ。

2人のその反応に 赤毛の少年は、訝しげな表情を浮かべて 睨みつけてきている。

「ロニイ坊やってば 1つしか変わらない 妹に ハリーを取られると 思っているのか？」

まあ 精神年齢の方は、上なのは、確かだろうけど。

グリフィンドールの皆様方をみていれば わかることだ」フレッドは、笑いを噛み締めながら 呟いた。

その言葉に ジョージも、苦笑しながら 言葉を繋げたようだ。

「なあゝに 大丈夫だって。

ハリーには、ハーマイオニーもいるし？

お前っていう 親友もいるんだからさ？

心配する事なんて ないだろうよ？

ジニーは、ミハーナだけで しばらくすれば 普通になるはずさ。 何たって 俺達の妹なんだからな？

まあ 初のご対面は、想像を絶するほど 驚くかもしれないけどな？」ジョージは、苦笑しながら 言う。

「きやあゝつて風に？」

まあ そんな可愛らしい悲鳴を上げるかは、別として。

ハリーの姿を見て 驚くのは、ジニーだけでなく ママもその類に含まれるだろうよ？

ママとジニーは、性格が似ているからな？」フレッドは、息をつきながら 呟く。

その言葉に ロンは、呆れたように 溜息をいつてしまっているようだ。

「当たり前だよ。

ジニーは、ママのお人形さんだから」ロンは、双子の兄達に聞こえないように 小さな声で、呟いた。

「お？あれじゃないのか？ダズリー家 っていうのは」フレッドは、何か見つけたらしく 苦笑しながら、言う。

ジョージとロンは、顔を見合わせて その先を、見つめた。

そこには、ハリーが教えてくれていた ダズリー家が、瞳の中に 写っている。

表札にも 『ダズリー』と記されており、間違いないようだ。

3人は、顔を見合わせて 頷き合った。

「ハリーの部屋は、どこなのか わかるか？

万が一の事を考えて 急いだ方が、いいかもしれないし」

フレッドは、首を捻りながら ロンを見た。

兄の質問に ロンは、肩をすくめながら 首を振る。

「多分 ホグワーツに来る前の部屋では、ない気がする。

確か 階段の下、倉庫だったらいいんだけど。従兄のダドリーとか言う子が 部屋を新しくして、移るらしい とかって、言っていたから。

ハリーも 部屋が代わったんじゃないかな？」ロンは、首を傾げながら 呟いた。

弟の言葉に フレッドとジョージは、呆れたように 溜息をいつてしまっているようだ。

「おいおい ちゃんと聞いておけよ」

兄2人の言葉に ロンは、困惑を隠せないように 肩をすくめてしまっている。

「だって 仕方が、ないじゃないか。連絡を入れても ハリーからの手紙は、来ないんだしさ？」

ロンは、そう言いながら 悲しそうな表情を浮かべてしまっているようだ。

そんな弟の様子に フレッドとジョージは、呆れたように 溜息をついている。

「ねえ お客さんがいるみたいだけど？」

ダドリーの知り合い？」

その時 背後から、声が聞こえてきた。

振り返ると 少年が2人、立っているようだ。

「確か…… ハリーの学校の友達だよ。」

キングズ・クロス駅で 紹介してもらったし」

ロンは、何かを思い出したのか ”あ ハリーの従兄”と 小さく声を発す。

フレッドとジョージは、それを聞いて マジマジと 小太りな少年を見つめている。

「確か…… ロンだっけ？」

ロン・ウィーズリー。

丁度 良かったよ。

ハリーの友達に連絡を取ろうと思っても どうすれないのか 困っているところだったんだ。

フィルにも話していたところなんだけど 変なことになっちゃっていてさ？」

ダドリーは、嬉しそうに 微笑む。

ウィーズリー兄弟は、驚いたように 顔を見合わせるしかない。

ハリーは、訝しげな表情を浮かべて 扉を見つめていた。

今日も 何もないまま 1日が、終わろうとしているようだ。

屋敷しもべ妖精のドビーがした 騒動のお陰で ハリーの自由は、ほとんど ないに等しい。

いくら ダーズリー夫妻に 弁解をしようとしても 聞く耳を持つてもらえず 拳句の果てに 鉄格子を嵌められてしまったのだから。

「ダドリーに頼んだら 手紙は、出せるかもしれないけど。

問題は、それを、どうやって 頼むかなんだよね？」

しかも 手紙を出すにも、僕 2人の住所 知らないし。

ヘドウィッグは、倉庫の中に 閉じ込められちゃっているしな？」

ハリーは、悲しそうな表情を浮かべて 溜息をつく。

その手には、前学期 ハグリットにプレゼントされた 両親のアルバムが納まっている。

写真の中にいる 両親は、今の状況のハリーの様子に 不思議そうな表情を浮かべながらも 笑顔を向けてくれていた。

「でも 良かった。

ホグワーツのものは、全部 ペチュニア伯母さんに没収されちゃったけど これだけは、取られなくて。というより 見逃されたっていうのが、合っているのかな？」

それとも 手にするのも、嫌だった とか？」

ハリーは、自分で言っておきながら 悲しい気持ちに なってしまっているようだ。

ホグワーツで落ち込むことがあった時は、主人の心境を読んで 使

い魔のヘドウィッグが、慰めてくれるはずなのに

けれど 今は、狭い部屋の中で 1人きり。

この状況に ハリーは、少し 限界を感じ始めている。

「ホグワーツにいる頃は、寂しいだなんてこと ほとんど なかった。

何だか 感傷に浸りそう。

いつも ロンやハーマイオニーがいて……他のみんなもいて、楽

しかつたのにな？

そういえば、ダドリーは、今日 お姉さんが、ホグワーツに通っているらしい。友達に、この状況のことを相談してくれているんだっけ？」ハリーは、息をつきながら、呟いた。

考えるのも、苦痛になってきた感覚になり、少年は、ベットに寝転び、そのまま、夢の中に入ることに。

ふと、外からは、ガタガタと檻の鉄格子を揺する音が聞こえてきたようだ。

何事かと、目を開けてみると、月明かりが、窓の鉄格子を通して差し込んでいる。

そして、誰かが、鉄格子の外から、部屋の中に捕らわれているハリーをジロジロ、覗いていた。

ソバカスだらけの赤毛に、背の高い誰かだ。

そのパンツを組み合わせて、少年は、その人物に行き当たる。

### 第三章

「ロン?!」

どうして　ここに?」

その声に　外にいる友人は、嬉しそうな表情を浮かべて　ハリーに手を振っているようだ。

ロンの隣には、フレッドとジョージもいるようで　ニツコリと微笑んでいる。

「ハリー!!」

迎えに着たんだよ?

驚いた!?!」

ロンは、満面の笑顔を浮かべて　ハリーに　声をかけた。

ハリーは、目の前に現れた　ウィーズリー兄弟に　驚きを隠せないまま　見つめ返していた。

窓の外では、どこにでもありそうな　真っ赤なバーンが、ロン達を乗せた状態で　宙に浮かんでいるのだ。

その車は、何か　特別な魔法が掛かっているのだろう。

「心配していたんだよ　ハリー?」

手紙で　約束していた通り　我が家に招待したい　っていう　誘ったのに　音沙汰なし……　1ダース以上は、送りまくったもんでエロールは、いつも以上に　疲労困憊さ。

しかも　3日前の夜　うちのパパが、家に帰ってくるなり　君が、マグルの前で魔法を使ったとかで　ドジな魔女が、何の調査もナシに　『公式警告状』を送ったって　聞いてさ?」

ロンの言葉に　ハリーは、驚きを隠せない。

「魔法は、僕が使ったわけじゃない。

「ただ、どうして君のパパが、その事を知っているの？」

友人の疑問に、赤毛の友人は、思いついたように笑った。

「僕らのパパは、魔法省に勤めているだ。

ただ、ハリー？」

学校の外では、魔法を使っちゃいけないってことは、君だってわ  
かりきっている事じゃないか」

「自分のことは、棚に上げるつもり？」

こんな車が、マグルの並ぶ家々の真ん前で、空を飛んでいるって  
いうのに」

ハリーは、浮かぶ車から視線を逸らさずに、神妙な顔だ。

その言葉に、ロンは、「これは、違うよ」と笑う。

「この車は、パパの持ち物。

ちよつと、借りただけなんだ。

別に、僕達が魔法を掛けたわけじゃない」

結局は、咎められることに違いない気がするの、気のせいだろうか？

「だけど、何の為に、こんな危険をしてまで？」

眼鏡を掛けた少年の問いかけに、「ゴタゴタ言つなよ」と溜息  
をついた。

「勿論、君を僕らの家に連れて行くからに決まっているだろう？」

当たり前のような顔をしている、ロンに、ハリーは、息を呑んだ。

「どうやって？」

僕もそうだけど……魔法で僕を、連れ出せないだろう？」

「わざわざ、そっちの危険を冒すまでもない。

誰が、協力してくれている、と、思ってる？」

赤毛の友人は、そう言う、前の席にいる、同じ顔の兄達を顎で指  
し、ニヤツと笑う。

「早くしないと、時間稼ぎも、持たないはずだ」

ジョージは、ゴソゴソと、していたかと思えば、ロープの端を、ハ  
リーの方に投げ寄せた。



「それを、鉄格子に巻きつけるんだ。

連れ出すには、まず　それが邪魔なんだから」

「伯父さん達が、気が付かれたら　とんでもない事になっちゃうかもしれないよ？」

今日は、従兄のダドリーが　友達の家遊びにいつていて　遅くなるらしいけど……　伯父さん達は、ちよつとした　音でも　敏感なんだ」

ハリーは、素直にロープを鉄格子に巻きつけながら　不安そうだ。  
フレッドは、そんな弟の親友に　”心配するな”と　エンジンを吹かす。

「そつちは、何とか　時間稼ぎしてくれているはずさ。  
ほら……　危ないから　下がって」

ハリーは、部屋の暗がりまで下がり　静かに事の展開を見つめる。  
エンジンは、だんだん　大きくなって　鉄格子が、すっぽり　外れた。

運転している青年は、そのまま　車を空中で直進。

窓際まで駆け戻り　覗き込んでみると　鉄格子は、地上スレスレの状態　フラフラしており　ロンとジョージが、息を切らせながら　車の中に引っ張り上げていつているようだ。

耳を側立ててみる限り　ダースリー夫婦は、この状態に気が付いていない。

フレッドは、鉄格子が無事に引き上げられたのを確認して　車をバツクさせ　できる限り　窓際へと近づける。

「僕の荷物……　全部　取り上げられちゃっているんだ。  
ヘドウィッグも、ダドリーが餌を上げてくれているらしいんだけど　倉庫に閉じ込められちゃっているし。

前まで使っていた　階段下の物置の中に……　鍵も掛かっているから　部屋から　出られな……　ガチャリ」

ハリーの言葉が言い終える前に　部屋の扉が、ゆっくり　開いた。  
驚きを隠せず　固まっていると　廊下に立っていたのは、見知らぬ

少年だ。

自分と同じ年ぐらいの黒に近いこげ茶色の色の髪をした 少年が、片手にヘアピンを持って 立っている。

「今のうちだよ。」

ダドーが、2人の気を逸らしてくれているから」少年は、小声で言った。

「マグルの小技か……………」。

習うだけ 時間の無駄だからって 馬鹿にする 魔法使いが多いけど…………… 知っていて 損は、なさそうだ」

「だな？」

トロいかもしれないけど 今回のような状況で 魔法を使えないんじゃない 覚えていた方が、良さそうだからな？」

フレッドとジョージは、感心したように 頷き合っているようだ。

「時間はあまり取れないから 簡単に自己紹介させてもらうね？」

僕は、フィリップ・シフォン。

ダドーに聞いていないかな？

僕の姉が魔女なんだ。

君達と同じ グリフィンドール生だよ」

ニッコリと微笑む少年に ハリーは、驚きを隠せない。

「ハリー…………… 時間がない。」

僕達が、トランクとヘドウィッグを運び出す。

君は、部屋の中から 必要なものを、片っ端からかき集めて ロンに渡してくれ」ジョージは、囁く。

ハリーは、双子とフィリップが踊り場の暗がりには消えていったのを確認して 部屋の中を飛び回るようにして 持ち物をかき集める窓の向こうの車の中に待機している ロンに渡す。

しばらくして 赤毛の双子の知り合ったばかりの少年が、重いトランクとヘドウィッグの入った 鳥籠を持ち上げ 階段を上がってきた。

下からは、バーノンの咳が聞こえ ダドリーが、声を張り上げて

何かを話しているようだ。

「ダドーも、そろそろ 話のネタが尽きてきたみたい。急いだ方がいいよ」フィリップは、呟く。

一同は、やっと トランクを担ぎ上げて 車の中に投げ入れる。

車は、大きく揺れたが 何とか トランクは、後部座席に納まってくれたらしい。

そして フレッドとジョージが、先に車に乗り込み ハリーが、ヘドウィッグの入った 鳥籠を車の中にいる 友人にパス。

ハリーは、続くようにして 車に飛び込もうとした瞬間 背後から 殺気の籠った 視線を感じた。

振り返ってみると 鍵の開いている 扉の前で バーノンが、怒れた 猛牛のように鼻を荒らげているようだ。

フィリップは、何とかして 阻止しようとしてくれたようだが 押し入られた衝撃で 背中を摩った状態で 蹲っている。

ロンとフレッドとジョージが、眼鏡を掛けた少年の腕を掴んで 力の限り 引っ張った。

その様子に バーノンが、”ペチュニアッ！”と 喚き出したようだ。

「奴が逃げるぞー！」

甥の足を掴もうとした手は、空を切り そのまま 男は、転がってしまう。

ハリーは、何とか 車の中に引っ張り込まれ ドアが閉まるや否や

”フレッド 今だ”と ロンが叫ぶ。

「アクセルを全開に踏むんだッ！」

車は、次の瞬間 月に向かって 急上昇していった。

後髪を引かれるように 振り返ってみると プリペット通りの家並みの屋根が、だんだん 小さくなっているようだ。



フィリップは、無事に自由を得た。ハリーの乗り込んだ車が見えなくなるのを確認して、小さく息をついた。

「これで、僕に出来ることは、終わったかな？」

後は、大人に任せるべきだもん」

友人の呟きに、ダドリーは、何とも言えない様子で、悪態をついている。父を見つめているようだ。

「大丈夫だよ、ダドリー」。

君のお父さんは、暗示に影響されているだけ。

元々、ハリーが、魔法に近づくことに対して、いい感情を持っていなかったみたいだから……それに、目を付けられただけさ。しばらくしたら、元通りになるはず」

「やっぱり、ハリーをホグワーツに行かせたくない奴の仕業なのかな？」

3日前に、屋敷しもべ妖精が、ハリーを訪ねてきたのと関係があるのかもしれないや」ダドリーは、神妙な表情を浮かべて言う。

息子の発言を聞いて、ペチュニアは、言葉が出ない。

ただ、夫を見つめているだけ。

「詳しくは、僕も知らないけど、あっちじゃ……ハリーは、物凄い、有名人らしいんだよね？」

いい意味でも、悪い意味でも……。

妖精が、そこまでして、ハリーに警告してきたってことは、何か意味があるんだと思うよ。

多分、ハリーをホグワーツに留まらせないように、色々と妨害してくるだろうね？」

友人が、息をつきながら呟いたので、ダドリーは、息を呑む。

「とにかく……何かが起こるのは、間違いないよ。

前回、連中は、失敗したわけなんだから、他の手を使ってくるはずさ。

まあ……魔法使いでもない、僕らの出る幕じゃないんだけどね？  
大丈夫だよ、そんなに心配しなくてもね？

ホグワーツには、偉大なる魔法使いがいるんだから」

「ところで ダドリーから 屋敷しもべ妖精が、どうか……  
って 聞いたんだけど？」

一体 何があつて 閉じ込められることになつちやつたわけ？」ロ  
ンは、待ちきれない様子で ハリーに問いかけた。

赤毛の友人の質問に 少年は、3日前の出来事を 話し出したよう  
だ。

突然 訪れた屋敷しもべ妖精と警告…… ケーキまみれ騒動……  
バーノンの異常な様子……。

話し終わると 3人は、ショックで 黙りこんでしまう。

「そりゃ…… 臭すぎる。」

怪しすぎるじゃないか そんなの」

フレッドが、まず 口を開いた。

同じ顔をした 兄の言葉に ジョージも、”その通りだ”と 頷い  
ているようだ。

「話が、極端すぎるじゃないか。

そのドビーは、結局 誰が、そんな罫を仕掛けているのか 教えて  
くれなかったんだらう？」

ハリーは、年上の双子の言葉に ”多分……”と あの妖精の様  
子を思い出す。

「教えられなかったんだと思うけど？」

ドビーは、何か話しそうになつたりする度に 自分で お仕置きし  
ないと気が済まないようだったんだ。

僕のところに来たことでも 家に帰ったら…… レンジで 耳を挟  
まないといけないらしかったし」

眼鏡を掛けた少年の言葉に 赤毛の双子は、顔を見合わせる。

「……………まさか フレッドとジョージは、ドビーが 僕に嘘をついたって言いたいのか？」

ハリーの問いかけに 双子は、困ったように 肩をすくめた。

「何て 説明したらいいんだろうな？」

『屋敷しもべ妖精』っていうのは、それなりに 魔力を持っている。勿論 俺達の持つものとは、違う力だ。

だけど 普通は、仕えている 主人の許しがなければ 使えない」

「だから ドビーは、君が ホグワーツに戻って来れなくするために 送り込まれてきたのかもしれないんだよ。

きつと 誰かの悪い冗談さ。

学校にいる奴の中で 君に恨みを持っている奴 思いつかない？」

「「いる」」

ハリーとロンの声が、綺麗にそろったようだ。

「ドラコ・マルフォイだ。

あいつは、僕のことを 目の敵にしている」

「マルフォイは、最初の組み分けの儀式の前 ハリーに友達になってやる って 他の新入生の前で 進み出てきたんだけどさ？

僕やハグリットのことを侮辱したから って ハリーは、それを退けた。

あいつが、他のスリザリン生と一緒に 嫌がらせをしてきたのは、その後からさ？」

弟の説明に フレッドは、“なるほどね？”と 頷いている。

いつの間にか 車の運転は、ジョージと代わったらしい。

「ドラコ・マルフォイは、ルシウス・マルフォイの息子だ。

パパが、そのいつのことを話しているのを聞いたことがある。

ルシウス・マルフォイは、例のあの人の信望者だって。

だけど、『あの人』が消えたとなると……………」

「そのルシウス・マルフォイは、世間に顔を晒すなり 全て 本心じゃなかった って 宣言したらしい。勿論 嘘八百さ。



金を役人に支払って 証拠も、握り潰させたに決まってる。

うちのパパは、奴が『例のあの人』の腹心の部下だったと考えているんだ。

現に 奴の奥さんの姉は、ある夫婦を拷問した罪で アズカバンに入っているんだから」

「だけどさ？」

僕 マルフォイ家に屋敷しもべ妖精がいるかなんて 知らないんだけど？」

ハリーの疑問に フレッドは、“ いるだろうさ”と どこか自嘲気味。

「マルフォイ家は、古くから魔法界で続いている旧家の末裔だ。

しかも 金持ちときた」

ジョージも“ 本当に”と 苦笑気味。

「うちのママなんか アイロンかけする『しもべ妖精』がいたらいいの だって しょっちゅう愚痴ってるさ。

だけど、うちになるといえば 喧しい屋根裏お化けや庭に巣食っている小人だけだ。

屋敷しもべ妖精っていうのは、大きな館とか城とかにいるもんなんだよ。

俺達の家には、絶対に来ないって」

その話を聞きながら ハリーは、色々な考えが頭の中で 巡っていた。

「とにかく 迎えに来てよかったよ。

だって……いくら手紙を出しても 返事をくれなかっただろう？ まあ 最初は、エロールのせいかもしれないんだけど……」

ふと ハリーは、“ エロールって？”と 首を傾げているようだ。話を聞いていると それは、ウィーズリー家の父親が子供の頃から

一緒にいる梟ふくろうの古株らしい。

「奴は、もう化石さ。

ちよっとした配達でも へばっちゃうんだから。

だから…… パーシーのヘルメス っていう 梟を借りようとした  
んだけどさ？」

溜息をつく友人の様子に 少年は、グリフィンドールの監督生のこ  
とを思い出しているのだろう。

たとえ 兄弟だろうが 鼻屑にしない 優秀なロン達の兄。

何でも その梟は、監督生になったお祝いに パーシーが両親から  
買ってもらった使い魔だとか。

スキヤバーズは、その結果 ロンへと下げられたらしい。

「まあ パーシーは、貸してくれやしなかったと思うぞ？」

だって 自分に必要だったらしいから」フレッドは、前の座席から  
水筒をハリーに手渡しながら 呟く。

その中身は、かぼちゃジュースだが ほとんど残っていない。

何でも ダーズリー家に向かっている途中 上空でぶちまけてしま  
ったとか。

「パーシーの奴さ？」

最近 おかしくないか？

手紙を山程どこかに出しているみたいだし…… 部屋に半端じゃな  
いくらい 閉じこもっているようなんだから。

部屋を出てきたと思ったら この休暇中 どこかへと出かけていく」

「もしかして ホグワーツを卒業する前に 色々な著名な人達に手  
紙を送って 卒業後は、偉大なことをするつもりなんじゃねえの？」

フレッドとジョージの会話を聞きながら 少年2人は、顔を見合わ  
せてしまう。

「ところで 君達のパパは、この車が 空を走っていることを知っ  
ているの？」

ハリーは、その質問をしなくても 答えはわかっていた。

「パパは、今夜 仕事でね？」

僕達が車を飛ばせたことを、ママに気付かれないうちに車庫に戻す  
算段になってる」

ロンの説明に 少年は、呆気。

本当に、そんな上手く計画が進むのだろうか？

「君達のパパは、魔法省で働いているんだっけ？　どういう仕事をしているわけ？」

ハリーの質問に、赤毛の友人は「一番つまんないところ」と面白くなさそうな様子だ。

「『マグル製品不正使用取締り局』だよ。

マグルが作った物に、魔法を掛けることに関係することさ。

つまり、それがマグルの店や家庭に戻された時の問題なんだけどね？」

「去年なんか、ある魔女のおばあさんが死んでさ？

その家族が、遺品わけと称して、家にあつた品々を、古道具に売ったのが騒動の始まりさ。

しかも、その店は、魔法使いやマグルも出入りする骨董店だったらしくて、どこぞのマグルのおばさんが、その魔法の掛かった品の1つの紅茶セットを買ったらしい。

聞いた話じゃ、お茶のポットが大暴れして熱湯をそこらじゅうに噴出したり、砂糖つまみの道具で鼻をつままれて、病院に担ぎ込まれた人もいたんだと。

その結果、パパは、何週間も残業続きだよ。

パパの他にいる同僚なんて……パーキンスっていう、年寄りだけなんだから……事実上、パパは、1人で、もみ消し作業に追われていたんだ。

まあ、ビルの友達が、マグルの色々な事情を知らせてくれたお陰で、被害は、広まらずに済んだらしいんだけどね？

知らせてくれた友達の中の1人も、犠牲者だったらしいんだけど。何でも、その家の子供が、3年生から使う、怪物の本に追い掛け回されたらしい」

ふと、ハリーは、それを聞きながら、とある疑問が浮かび上がってくる。

「だけど、これは、いいの？」

この車は、君達のパパが魔法を掛けたものなんでしょう？」

眼鏡を掛けた少年の言葉に フレッドは、“そうさ？”と 声を上げて笑う。

「うちの親父ときたら マグルのことなら………なんでも 興味津々なわけ。

お陰で 家の納屋には、マグルの物がいっぱい 詰め込まれている。パパのホグワーツ来の友達の話じゃ そういうのをバラバラに分解して 魔法を掛けた後にそれを組み立てるのが大好きらしい。

もしも 親父が自分の家を抜き打ち調査してみろ？

たちまち 自分を逮捕しなくちゃいけないだろうな？」

「もしも そうなれば お袋は、気が狂わんばかりに泣き叫ぶぞ？

だから 言っただでしょうッ！ってね？」

ジョージが“大通りが見えてきた”と フロントガラスを覗きながら 皆に声を掛けた。

「10分ほどで 着く。

良かったな？

もう 夜も明けてきたみたいだし。

何とか お袋をごまかせる言い訳が、浮かび上がってくるかもしれない」

東の地平線が、ほんのりと桃色に染まっており 夜が明けてきたらしい。

フレッドが、高度を下げ ハリーの目には、畑や木立の茂みが黒っぽいパッチワークのように見えてきたようだ。

話によれば ウィーズリー家は、『オッターリー・セント・キャッチポール』 という から少し外れた場所に位置しているらしい。

空飛ぶ車は、徐々に高度を下げ 木々の間から 真っ赤な曙光が差し込み始めている。

運転している青年の“着地成功”という 言葉と共に 車は、軽く地面を打って 一同は、無事に着陸した。

着地した場所は、小さな庭のボロボロな車庫の脇だ。

少年は、その時初めて ホグワーツでの初めての友人の家を眺める。そこは、かつて 大きな石造りの豚小屋だったのかもしれない。

あっちこっちに 部屋を無理にくっつけている 数階建ての家。

クネクネ と 天に向かって曲がっており おそらく 魔法で何とか 支えている状態なのだろう。

赤い屋根には、煙突が4・5本 ちょこんと 載っかっている状態。入口近くには、看板が少し傾いて立っていた。

隠れ穴

と書いてあるようだ。

玄関の周りには、ゴム長がゴタ混ぜに転がっており 思いっきり  
さび付いた 大鍋が置いてある。

丸々と 太った茶色い鶏が数羽程 庭で 餌をついばんでいるらしい。

「ハリー……別に たいしたことないだろう？」ロンは、どこか  
恥ずかしそうに肩をすくめながら 呟いた。

けれど 眼鏡をかけた少年は“すごいよッ！”と 目を輝かして  
いるようだ。

プリペット通りに比べると 幸せな気分が、込み上げてくるような  
感覚なのだから。

「僕……こんなにいいところ、初めて来たッ！」

ハリーの発言に ウィーズリーの3人は、驚きを隠せない様子で  
顔を見合わせてしまう。

「とにかく 直ぐに 静かに2階に行くんだぞ？」

それで お袋が、朝食の時間だと呼ぶまで 静かに待つ。

で………ロン？

お前は、下へ飛び跳ねながら 降りて行って 言うんだ。

『ママ 夜の間に誰が来たと思う?!』ってな？

そうすりゃ お袋は、ハリーを見て 大喜び。

俺達が車を飛ばしたことなんか あやふやになって………誰も知ら  
なくて済む「フレッドは、真剣な表情を浮かべて 言う。

その言葉に ロンは、神妙な表情を浮かべて 頷いているようだ。

ハリーは、そんな兄弟の会話に 訳が分らず、首を傾げてしまっ  
ていた。

そんな少年の様子に ロンは“大丈夫だよ？”と ニツコリと微笑  
んでいる。

「ハリー こつちだ。

僕の寝室は………」

次の瞬間 赤毛の友人の顔は、一気に 蒼ざめた。

兄弟の視線は、一箇所に 釘付けになってしまっているようだ。視線を向けてみると 赤い髪をした 女性；モリー・ウィーズリーが、庭の向こうから 鶏を蹴散らせながら 猛然と突き進んでくる。小柄な丸っこい 優しいような顔なのに 鋭い牙を剥いた虎を連想させてしまうのは失礼だろうか？

ウィーズリー夫人は、44人の前で止まり 両手を腰に当てて バツの悪そうな顔をしている 1人1人を睨んだ。

花柄のエプロンのポケットからは、魔法の杖らしき物が見えている。母の“それで？”という言葉に ウィーズリーの子供達は、なるだけ 朗らかに見せるように 朝の挨拶をした。

「貴方達？

母さんが、どんなに 心配したのか わかっているの？」

その低い声は、凄みが効いているようだ。

3人は、夫人よりも背が高いようなのに 怒りを露にしている母親の前では、小さく縮こまってしまっている。

「だって 仕方がないじゃないか！

ハリーってば 閉じ込められていたんだよ？

しかも 杖もふくろうも取り上げられていて、連絡も出来ないでいてさ？

ダドリーが、協力してくれて ハリーを連れ出すことにも、成功したんだから」 ロンは、悲しそうな表情を浮かべて 呟いた。

「そうだよ！

おまけに 窓に、鉄格子まで つけられていたんだぜ？普通にやっていたら ハリーは、ホグワーツに 来られなかったかもしれないんだから」

フレッドも、弟の言葉に 続いていく。

「それに 間違いなく 魔法使いが、何かを企んでいるんだ。

屋敷しもべ妖精が、ハリーの伯父さんに魔法を掛けてまでして 俺達と連絡を取れなくしていたんだから」 ジョージは、神妙な表情

を浮かべて 言う。

息子言葉に モリーは、訝しげな表情を浮かべて “それとこれは、別です！” と叫んだ。

「貴方達が使った あの車は、お父さんが 魔法省に無断で 魔法を掛けたものなんですよ?!」

それが 罪に問われるようなことになってしまったら……… どうするつもりだったんです?!

そうなってしまったら お父さんは、魔法省でのお仕事を失うことになるかもしれないんですよ?!」

ウィーズリーの母の言葉に 息子達は、言葉が見つからず 戸惑いながら 顔を見合わせていた。

「夜中に、ベッドを覗いてみれば 中は、空になっているし!!」

メモもない!

車は、消えていた!

何事 ! と思ったでしょうが。

もしかして 事故に巻き込まれてしまったんではないのか って心配で……… 堪らなかったんですからね?!」 モリーは、顔を真っ赤にさせて 叫んでいる。

母の言葉に ロンと双子は、言葉が見つからないようで 顔を見合わせてしまっていた。

「こんな事 ビルやチャーリー……… パーシーだって 一度も なかったわ?!」

お父さんが、仕事から帰ってきたら 覚悟なさい?」 モリーは、難しい表情を浮かべて 言い放つ。

母のその言葉に 3兄弟は、困惑を隠せない様子で 顔を見合わせてしまっていた。

ハリーは、そんな友人達の様子に 戸惑いを隠せない風に、居心地の悪い 心境に………。

そんな少年の様子に気が付いたのか モリーは、ニッコリと微笑んだ。



「ハリー？」

貴方は、何も 気にしなくなたって いいのよ？

ほら 疲れたでしょう？

かぼちゃジュース 飲む？

それとも 朝食にするかしら？」モリーは、先ほどとは違って 優しい口調で、話しかける。

先程までの鬼の形相の変わりぶりに 一同は、呆気に取られてしまう。

「ママってば ハリーには、優しいんだ。」

僕らには、厳しいことを 言うくせに「ロンは、どこか 訝しげな表情を浮かべて 呟おた。」

フレッドとジョージも、苦笑しながら 顔を見合わせてしまっているようだ。

「仕方ないって。」

ママは、昔から ジニーと一緒に、ハリーの事ばかり 色々と話していたんだからさ？

セーターだって 随分 力を入れていたようだし？」

フレッドは、そう言いながら 小さく溜息をついてしまっている。

「だよな？」

去年、キングズクロス駅で会った時 ジニーを注意していたけど 内心は、絶対 大騒ぎしていたんだろうよ？

ミーハーは、母娘 同じだから「ジョージも、苦笑しながら 呟いた。」

そんな3人の様子に ハリーは、困惑を隠せない。

「とにかく 家の中に 入りなさい？」

まだ みんなは、眠っているけど そろそろ 起きてくるでしょうし。

昨日の夜から オリバーとオリビアが、遊びに来ているのよ」

モリーは、そう言って 皆を、家の中へと 招き入れていった。



「あら？」

もう 明け方だわ？

少女は、苦笑しながら 小さく欠伸をしながら、大きく伸びをした。伸びをした時に キヤミソールから、肌が 露見してしまっている。そんな少女の様子に 青年は、どこか 息をついてしまっているようだ。

青年の様に 少女は、不思議そうな表情を浮かべて 首を傾げてしまっている。

「年頃の女の子が、そんな仕草をするな だつてさ？」

しかも 格好も、格好だし？

我等が 監督生殿は、そう思っているらしい。相変わらず お堅い性格をしているよ。

今年も、また 厳しいんだろつよ？」もう1人の テーブルで、コーヒーを飲んでいる 青年は、苦笑しながら 言った。

その言葉に 少女は、どこか 訝しげな表情を浮かべてしまっているようだ。

「1つ 言わせてもらっただけど……私も、パースと同じ 監督生なんだけど？」

今年だつて 任命されたんだから。

まるで 私は、違うようじゃないの！

失礼しちゃうわッ！？」

少女の言葉に 2人の青年は、顔を見合わせて 吹き出してしまっていた。

「オリビアってば 本当に 分りやすいよな？」

本当に 顔に、出やすいしさ？

まあ……その分Mりやすくて いいんだけど」

眼鏡を掛けた赤毛の青年 パーシー・ウィーズリーは、大爆笑。

その言葉に オリビア・シフォンは、膨れっ面になってしまっているようだ。

オリビアの様に オッドアイのの瞳を持つ青年 オリバー・ウツ

ドも、パーシーと一緒に 大笑いしている。

そんな青年2人の様子に オリビアは、神妙な表情を浮かべて 溜息をつく。

「2人共 笑いすぎなんだけど？」

まあ 私なんて……… いつも 周りに、笑われてしまっただけかなんだけど？

何だか 怒る気にも、なれなくなってきちゃったわ？」

エメラルド色の髪をした少女の言葉に パーシーとウッドは、不思議そうな表情を浮かべて 顔を見合わせてしまう。

「そういえばさ？」

モリーおばさまの怒鳴るような声が、聞こえた気がしたんだけど？  
誰かが 抜け出しているのだの、どうか って「オリビアは、思い出したように 呟いた。

少女の言葉に パーシーは、苦笑してしまっているようだ。

そんな友人の様子に オリバーとオリビアは、不思議そうな表情を浮かべて 顔を見合わせた。

「何でも 我等が、弟君達が 夜中に、ベッドを抜け出してしまうたらしいんだよ。

まあ さつき、外の方から 母さんの声が聞こえていたから、帰ってきたらしいけど。

お前達が、行動を起こす前に やってのけたみたいだ」

振り返ると 赤毛のロン毛をポニーテールにまとめた、男が立っている。

「ビルも、起きたんだ？」

今日から お仕事？」オリビアは、ニッコリと微笑んで 言った。

少女の言葉に ウィーズリー家の長男のビル・ウィーズリーは、息をつきながら 頷いているようだ。

「本当に てんてこ舞さ？」

最近 本当に 呪いが、深刻化しているらしい。

今朝 いつもより 早い時間に 出ることになってしまっよ」

ビルの言葉に 一同は、心配そうな表情を浮かべてしまっている。  
「それじゃあ もう出るんだ？ 着替えたみたいだしさ？」

パーシーは、真剣な表情を浮かべて 兄を見た。

その言葉に ビルは、苦笑しながら 弟の頭を、思い切り ぐちゃぐちゃに。

兄の行動に パーシーは、戸惑いを隠せないまま 訝しげな表情を浮かべてしまっているようだ。

「あゝあゝ？ パーシーの寝癖……… 余計 酷くなったね？」

オリバーとオリビアは、苦笑しながら 顔を見合わせてしまう。

扉を開けてすぐに入ると そこは、台所だった。

どこか 小さくかなり狭苦しい空間だ。

しつかりと 使い込まれたらしい 木のテーブルと椅子が、奥の方に見えている。

ハリーは、去年 自分が魔法使いだと わかったばかりだった為 魔法使いの家の中に入ったことがない。

入っただけに見えている壁には、時計があつた。

それは、針が1本しかないものの 数字の代わりに 『お茶の時間』 『鶏に餌をやる時間』 『遅刻よ』などと 書き込まれているようだ。

暖炉の上には、本が3段重ねに積まれている。

少し振り返ってみると 流しの脇に置かれている古ぼけたラジオから 放送が届く。

「おはようございますッ！

お先に、飲み物 頂いてまゝす」

ふと その声に辺りを見回してみると テーブル席には、見知らぬ顔と見知らぬ少女のがあつた。

少女の言葉に モリーは、苦笑してしまっているようだ。

「あら いいのよ？

にしても……普通に 作つたの？

別に 息子を使ってくれたら 良かったのに」

そんな母の様子に 一緒にコーヒーを飲んでいる 息子と友人は、顔を見合わせている。

「えっと この女の人？」

ハリーは、エメラルドの長い髪の毛を下ろしている肌の露出された服装の少女に少し肩をすくめてしまう。

そんな眼鏡を掛けた弟の友人の様子に 寝癖だらけの髪の毛のパーシーは、“オリビアだよ”と 苦笑気味。

「嘘だろ……牛乳瓶の厚底の奥には、こんな顔が眠っていたのかよッ！」

フレッドは、信じられない というように 声を張り上げる。

その隣では、ジョージとロンも、呆気にとられてしまっているらしい。

「フロントは、もしかして……オリビアの素顔に 一目惚れしたんだったりしてな？」

確か 俺らが、入学した辺りから お熱だった気がするけど」

「だけど……眼鏡は、どうしちゃったわけ？」

いつもの 牛乳瓶の底のような眼鏡は……」

「不測の事態が起こって……砕け散ったの。」

だから この新しい眼鏡を試しに使っているのよ。

今のところは、良好だから……このままかもしれないわ？」

ウィーズリー夫人は、子供たちの様子に息をついてから フライパンに ソーセージなどを投げ入れ 朝食の準備に取り掛かっている

「オリビアの目……僕と同じ 翠なんだね？」

ちよつと 驚いちゃった」ハリーは、不思議な感覚に陥りながら 呟いた。

眼鏡を掛けた少年の言葉に ロンと双子も、ハツとしたように 顔を見合わせているようだ。

「同じで当たり前。」

ハリー……ホグワーツにいる時は、私自身 詳しく話していいのか迷っていたんだけど……」

オリビアは、胸元につけている ブローチの中から 何かを取り出して “コレを見て？”と 見せてくれる。

そこには、幼い頃のものなのだろう オリビアの姿と何度も見たこ

とのある 優しい江上を浮かべた 赤毛の女性が微笑んでいた。

「ここに映っている女の人は、私の母……………ソニア。

貴方のお母さんと伯母さんの一番上の姉なの。

随分 年が離れていたそうよ」

突然の告白を聞いて ハリーは、驚きを隠せない様子だ。

それは、知らなかったらしい ロン達も同じこと。

「じゃあ……………何？

ハリーとオリビアって……………従姉弟だったの？

なら ハリーを引き取るのは、あのダーズリー家じゃなくても 良

かったってことなんじゃない？」ロンは、真剣な表情を浮かべて

言う。

「出来れば そうしていたかもね？

だけど 母と父は、１１年前に 死んでしまったから。

母方の親戚とは、折り合いが悪かったみたいで その後は、孤児院

で育ったから……………貴方を引き取ることが出来なかった。

……………魔法界の英雄さんを、マグルの孤児院に保護できるはずがな

い って 魔法省幹部の大反対を受けたみたい。

結局は、貴方のお母さんの唯一の血縁者である ダーズリー家に預

けられた ってわけ」

どこか 遠くを見つめるように苦笑する年上の魔女に 一同は、言

葉が見つからない。

「ところで ハリー？

貴方 部屋に閉じ込められていたんですってね？

弟から それを聞いて……………昨日の夜から オリバーやパースと作

戦を考えていたところだったのよ？

魔法を使わず 且つ マグルの目に留まらないような 貴方の救出

方法。

結局は、どこかの ド素人が、とんでもないやり方をしてしまった

けれど」

その言葉に ロンとウィーズリーの双子は、視線を泳がせた。



だが ハリーは、違うことに ハッとしているようだ。

「弟……………つてさ？」

もしかして マグルの男の子？

僕の従兄のダドリーと友達になつたらしい子が、お姉さんが、グリフィンドール生だつて言っていたけど……………」

「フィル……………フィリップの事ね？」

そう……………あの子は、私の弟よ。

父は違うけど 母は、同じだから あの子も、貴方とイトコになるわ？

あの子には、ホグワーツの入学通知は届かなかったけれど 何かと相談に乗れると思うわ？

ダドリーと友達になつたのは、偶然が重なつたようなんだけどね？」  
その言葉に ハリーは、安心させてくれるような少年の笑顔を思い出す。

「へえ……………だからこそ 救出作戦は、成功したわけだな？  
じゃなかったら 無事 戻れなかっただそうし」オリバーは、平然と 不吉なことを言い出した。

「本当に……………無茶なことをしたわね？」

モリーは、フライパンを持って それをテーブルの上に並べてあるお皿の上に ソーセージを滑り込ませたようだ。

眼鏡を掛けた少年の前にあるお皿には、何本もソーセージが載せられていく。

「夫とも 心配していたのよ？」

ロンが、貴方からの手紙の返事が送られてこない と 言うものなのだから。

新しい教材の通知が来ても この状況が続くようだったら……………迎えに行く計画を立てていたというのに」

モリーは、訝しげな表情を浮かべて 息子達を見つめながら、溜息をつき 今度は、目玉焼きをお皿に移す。

「だけど……………フィリップは、大丈夫なのかな？」

ダドリーは、あまり 叱られないだろうけど 僕を逃がしたのを手助けしたことで……伯父さんと伯母さんに 咎められていなければいいんだけど」

不安そうに呟くハリーに オリビアは、”大丈夫よ”と 笑みを浮かべた。

「あの子は、不思議なことに どんなに怒り狂っている相手でも……宿めちゃうから。」

それに 得意のお菓子料理で……和ませちゃっているんじゃない？」

「だといいいんだけど……何かあれば お隣さんが、仲裁に入ってくれると思うんだ。」

近所の目を、気にしている伯父さん達だけど お隣一家のことは、少しだけ 信頼しているみたいだから」

「おば様……………落ち着きましたか？」

女は、頂垂れてしまっている女性に 暖かい飲み物を差し出した。

「ありがとうございます……………迷惑をかけてしまって ごめんなさいね？」

前回だけではなく 今回までも……………」

その言葉に 女は、ニツコリと微笑んだ。

「困った時は、お互い様ですよ。」

それに 今回の出来事は、誰のせいでもない……………不幸な偶然が、重なってしまっただけです」

「ドーリスの言う通りですよ 奥さん？」

ご主人は、しばらくの間 ぼーっと しているかもしれませんけど

異常はありませんから」

白衣を着た 勝気な口調の女が、ゆつくりと近づいてくる。

「エシー……………ありがとうございます？」

専門分野ってわけじゃないのに 頼んじやって」

「別にいいのよ。」

確かに あっ…ちには、知らせるわけにいかないものね？

事が明らかになっっていない以上……信用されないでしょうし。

関わったのは、極 最近のことだけど 胡散臭がられるのが、関の山ってことぐらい……分かりきっているわ」

「アントンとトロイも 同じ事を言っていたわ？」

ステラのお兄さん当たりは、笑っているだけだったし ベネディクトは、十字を切る始末」ドーリスは、苦笑しながら 呟く。

「まあ……こっちは、落ち着いたらから これ以上 悪いことにはならないんじゃない？」

どういう目的があって こんなことになったのかは、別にして」

2人の女性の会話を聞きながら 少しずつ 落ち着いてきた人物は、天井を見上げた。

「結局 いつまで経っても……私は、連絡が来るのを待つしかないのね？」

あの時も……そして 今でさえも」

その声は、どこか 悲しげだ。

「それにしても……………不正魔法の車で国中の空半分も飛んでくるだなんて 誰かに見られてしまったいたら、どうするつもりだったのかしら？」

そう言つて溜息をつく　モリーは、当たり前のように流しに向かつて杖を一振りすると　その中では、勝手に皿洗いが始まった。流し台からは、カチャカチャと軽い音が聞こえてきているようだ。

「ママ……………訂正しておくけど　曇り空だったよ？」

フレッドの言葉に　夫人は、“おしゃべり禁止ッ！”と　一括。

「だけどさ？」

連中は、ハリーを餓死させていたかもしれないんだぜ？

それに　伯父さんは、話を聞いた限りじゃ……………間違いなく　操られていたはずなんだから」

ジョージの言葉にも　モリーは、黙るよう命じて　ハリーのためにパンを切つて　バターを塗り始めると　前よりも和らいだ表情になる。

あまりにも違いに　眼鏡をかけた少年は、戸惑いを隠せない。

オリバーやオリビアは、その七変化のような姿に見慣れているのか　気にすることもなく　パーシーと何か話し込んでいた。

その会話は、よく聞こえないが　最近のパーシーの不思議な行動に　関係があるようだ。

ふと　その時　みんなの気をそらすことが起こる。

ネグリジュ姿の小さな赤毛の女の子が“おはよう”と　台所に入ってきたかと思うと　“キャッ”と　小さな悲鳴を上げて　また走り去ってしまった。

ロン達は、青い眼をしていたが、明るい鳶色が、パツチリとしていた女の子だ。

呆氣に取られていると ロンが“妹のジニーだ”と囁く。

「夏休み中……ずっと君のことばかり話していたよ」

その言葉に フレッドとジョージも “ そうだったな？ ” と 優しげに苦笑。

「**だけど おかしくないか？**」

「あいつが、あんなにシャイでいるなんてさ？」

「まあ、そうだな？」

いつもだったら おしゃべりなのに。てつきり ハリーに質問攻めするもんだと思ってた」

けれど 双子は、母親と視線が合うや否や すぐ 俯いて 後は、  
黙々と朝食を食べ始めた。

パーシー達3人は、どこかへ出かける約束になっているのか、すぐ出かけてしまったようだ。

ハリー達は、4つの皿が空になるまで 誰もしゃべらないままで、  
食事が進む。

「何だかどつと疲れた気がする」

フレッドは、やっこのことでナイフとフォークを置いて 小さく欠伸をする。

「僕  
ベットでゆっ  
くり休みたい  
……」

“ ロンの弦きに モリーは、 いけませんよ？ ” と一言が。

「夜中に起きていたのは、自分が悪いんです。」

庭に出て 庭小人を駆除しなさい？

また 手に負えないくらいに 増えてしまっているんですから」

[illegible]

夫人に、ギロリと睨まれてしまい 肩をすくめてしまう。

「ハリー？」

貴方は、上のロンの部屋でゆっくり休みなさい？

あのしょうもない車を飛ばしてくれ　　って　　貴方が頼んだわけじゃ

ないんですもの」

「でも 僕も、手伝います。

だって 3人は、僕のために危険を承知で駆けつけてくれたんだし…… ウィーズリー家の家族に迷惑になることを考えたら 甘えるわけにいかないから」

バッチリと目の覚めているハリーの言葉に モリーは、” まあ 何て優しいの？”と 大げさな様子。

「でも 庭小人の駆除って とても 退屈な仕事なのよ？  
そうだわ？

ロックハートの本で、効率的に駆除する方法があつてね？」

ウィーズリー夫人は、そう言つて 暖炉に積み上げられている分厚い本の山から 本を1つ引つ張り出した。

本の背表紙には ギロデロイ・ロックハートのガイドブック―一般家庭の害虫

ギロデロイ・ロックハートのガイドブック―一般家庭の害虫  
と デカデカと豪華な金色の文字で書名が見えているようだ。

表紙には、波打つブロンドに輝くブルーな瞳のハンサムな魔法使い

(ハリーは、コンラッドの方が美男子だと思つたが)の姿が。

「ママつてば 彼にお熱なんだよ。

あんな顔だけの魔法使いのことなら……何でも 信じちゃうのさ」  
フレッドの囁きが聞こえたのか モリーは、“馬鹿なことを言わないで”と どこか顔を赤らめてしまっているらしい。

その後 ハリー達は、庭に出て 庭小人を駆除する作業に入る。

ウィーズリー家の庭は、広く ダーズリー家の中庭など 本当に小さい物だと実感した。

まあ ペチュニア伯母さんは、気に入らないかもしれないけど。

雑草は、生い茂り 芝生は、伸び放題になってしまっているのだから。

けれど 壁の周りには、曲がりくねった木で囲まれており 花壇という花壇には、これまで見たことのないような植物が溢れるばかり

に茂っており 大きな翠色の池は、蛙で一杯だ。

「僕…… マグルの庭にあるような、飾り用の小人しか知らないんだけど どんな生き物なの？」

その庭小人って。

小人、って聞いたら ドワーフでしょう？

マグルの御伽噺とかでは、働き者で 友好的 って イメージがあるんだけど「ハリーは、庭の様子にどこか目を輝かせながら 呟く。眼鏡を掛けた少年の質問に ロンは“ああ、マグルが庭小人だと思っっている奴ね？”と 苦笑気味。

「前にマグルの世界で生活している知り合いが、面白がって持ってきたのを見せてもらったことがあるよ。

何だか 太ったサンタクロースの小さな釣竿を持っているような感じじゃなかったっけ？」

ふと ドタバタと何かが暴れるような音が聞こえて 芍薬の茂みが震え、中からフレッドとジョージがニヤニヤしながら 立ち上がる。「これぞ 本当の庭小人さッ！！」

双子の言葉に、手にしている何かを見ると ソレは“放せ 放しやがれッ！”と 小さな生き物がキーキーと喚いていた。

確かに ソレを見る限り サンタクロースとは、似ても似つかない感じだ。

小さくゴワゴワした感じで ジャガイモ そっくりの凸凹した大きな頭の禿頭。

堅い小さな足で 自分を掴んでいる フレッドとジョージを蹴飛ばそうと暴れるので 2人とも その攻撃を受けないように 長い腕を伸ばして捕まえているらしい。

何でも 油断している 剃刀のように鋭い歯で 相手の指を噛み切ろうとするとか。

確かに 先ほどから フレッドの指を噛み切ろうともがいているのもいるし 新しくジョージに捕らわれた少し大きめの庭小人も、殺気の籠った目で 機会を窺っているかのよう。



「連中は、あまり賢くないんだ。  
庭小人の駆除が始まると 連中は、寄ってたかつて見物にやって来る。」

巢穴の中にいれば、安全だっていうのに 未だにそれが、理解できていないのさ」

「連中は、いくら 駆除しても 戻ってくる。  
きっと ここが気に入っているんだらうな？」

パパは、甘すぎるんだよ。

面白い奴らだと思っっているみたいだから」

「だけど その小人をどうするの？」

確か 駆除する って………」

どこかショックを受けてしまっているハリーに ウィーズリーの3人兄弟は、顔を見合わせて笑う。

「別にさ？」

小人を傷つけるわけじゃない。

ただ、完全に目を回させて 巢穴に戻る道をわからなくさせちゃえばいいだけなんだから」

ロンは、そう言って 新たに捕まえたお手本といわんばかりに

小人の踵から手を離すと ソレは、宙を飛んで 5・6？先の垣根の外側の草むらに落ちる。

フレッドとジョージは、随分 離れた切り株の辺りまで 楽々と投げ捨てていたが。

ハリーは、最初 庭小人の待遇が、あまりに可哀想だと最初のうちこそ思っていたが たちまちに そうも思わなくなった。

捕獲 第一号を垣根の向こうに 優しく ソツと 落としてやろうと思っていたのに 最初 忠告されていた通り、弱気だと感じ取られてしまったのか 思い切り 剃刀のように鋭利な歯を、指に食い込まされてしまったのだ。

少年は、懸命に振り払おうと散々てこずり やつとのことです  
5・6？ほど飛ばすことに成功。

「オリビアなんか 20? は、軽く飛ばしてたぞ？」

何でも お袋の肩身のネックレスの鎖を思い切り引きりぎられそうになったんとさ。

今は、何かと危ないから ブローチにしたらしいけど」

「ああ……… 確か 初めてうちに遊びに来た時だっけ？」

最初は、随分と怖がつていたようなのに 今じゃ 長年やり続けている俺達よりもお手の物さ」

その後 ハリー達は、何とか 駆除が一段落したので 隠れ穴の中に入った。

ちょうど どこからか戻ってきた パーシー達とも一緒だ。

「何だよ。

駆除が終わる時間を考えて 帰ってきたんじゃないだろうな?」「フレッドとジョージは、訝しげな表情を浮かべて 兄とその友人に声を掛ける。

赤毛の双子の言葉に 3人は、顔を見合わせてしまう。

「おいおい……… お前ら？」

僕らは、別に遊んでいたわけじゃないんだぞ?」

パーシーは、訝しげな表情を浮かべて 弟達の髪の毛をワシワシと撫でた。

その結果 全員が、ハリーのように 跳ね毛になってしまっているようだ。

眼鏡を掛けた赤毛の兄の報復に 3兄弟は、顔を見合わせるしかない。

「後で、みんな 鏡の前でにらめっこになるわね?」オリビアは、クスクスと楽しそうに ハリーとオリバーに囁く。

「だけど おばさんの機嫌は、直ったのかな？」

朝食の時は、お世辞にも いい雰囲気じゃなかったからね？」

うちにいるよりも 緊張しちゃったよ」オリバーは、どこか息をつきながら 言う。

中からは、甲高い女性の声と落ち着きのある男性の声が聞こえてい

る。

「パパが帰ってきた！！」ロン達3人は、その声を確認して 同時に叫ぶ。

パーシーも友達の前だからか落ち着いているようだが 内心は、嬉しいのかもしれない。

家の中に入ると 男性；アーサー・ウィーズリーは、台所の椅子に倒れるようにすわり 眼鏡をはずして、目を瞑っていた。

細身で禿げていたが わずかに残っている髪の色は、ロン達と同じ赤毛だ。

ゆったりとした長い緑色のローブは、埃っぽく 旅疲れに浸っているらしい。

「酷い1日だったよ」子供達が周りに座ったのに気が付いたのか無意識なのか ポットを弄りながら、呟く。

「9件も抜き打ち調査することになったんだッ！」

マンドングラス・フレッチャーなんか…… 私が後ろを向いた際に呪いを掛けようとしたし」

ウィーズリー氏は、お茶をゆっくりと一口飲むと 深く溜息をついた。

「パパ 何か面白いこと無かった？」

フレッドは、急き込むように 質問。

ジョージも、どこか興味津々な様子だ。

「私が押収したのは、せいぜい 縮む鍵が数個と噛み付くヤカンくらいだ。

本に追い回されている男の子がいるという情報は、ある意味正しかったが それは、店の店主が誤って スクイブの男の子に怪物の本を売ってしまっただけのことだったらしいしね？」

私が駆けつけた時には、もう解決していたんだ」

アーサーは、そう言いながら 本当に疲れているのか、大きく欠伸をしている。

「まあ かなりすごいものが1つあったらしいが それは、私の管轄外だったんでね？」

モートレイク辺りが、引っ張り出されて 奇妙なイタチについて尋問を受けたようだかね？」

多分 あれは、実験的呪文委員会の管轄になるだろう」

「あら………… ペニーのお父様が室長している部署ね？」

今日 ペニーの家に行ってきたんですよ？」

ちよつと 気になることがあったりして 調べていたんです」オリ

ビアは、どこか嬉しそうに呟く。

息子の友人の言葉に ウィーズリー氏は、“そうか”と どこか肩をすくめてしまう。

「だけどさ？」

鍵を縮めたりして 何になるわけ？」

ジョージは、不思議そうに呟いて 首を捻った。

アーサーは、難しい顔をして “マグルをからかうためだ”と 深く溜息だ。

「マグルにそういった魔法の掛かっている鍵を売って いざ その鍵を使う時には、縮んで見つからないようにしてしまうんだよ。

勿論 犯人を挙げることは、至極 難しい。

マグルは、鍵が独りでに縮んだなんて 誰も認めないだろうからな？ おそらく、鍵をなくしたと言ひ張るだろう。

魔法を鼻の先に突きつけられたって 徹底的に無視してしまうんだよ。

まあ 中には、魔法を信じるマグルも入るが 彼等の世界では、そういう人々を頭がおかしいと決め付けてしまうんだからな？」

マグルの前に公になっている悪戯的な魔法なんて、全く途方もない物が………… 「たとえば車なんか？」

その声に振り返ってみると 一同は、思わず飛び上がった。モリーが、長い火掻き棒を刀のように構えているのだ。

アーサーだけは、初めて パッチリとパープルの瞳を見開いて 奥

さんをバツの悪そうな様子で見つめている。

「モリー……く……車とは、どういうことなんだい？」

夫の反応に ウィーズリー夫人は、“ええ アーサー？”と ランランな目でニツコリと笑った。

「あの車のことです。」

ある魔法使いが息子の友人から中古でオンボロ車を安値で買い取って 奥さんには、仕組みを調べるために分解すると言っておきながら 実は、呪文をかけて 飛べるようにした というお話もありますわ？」

それを聞いて アーサーは、目をパチクリ。

「あのだね？」

わかつてもらえると思っているが それを行った人は、法律の許す範囲で行ったものでな？

知つての通り 法律というのは、抜け穴があるのだよ。

だから その車をければ その車が、たとえ飛ぶ能力を持っていたとしても……「アーサー・ウィーズリー……！」

ウィーズリー氏の言い訳の途中で 夫人が、大声で叫んだ。

「貴方は、その法律を作った時に しっかりとその抜け穴を書き込んだのでしょッ！」

そんなモリーの様子に ハリーは、驚きを隠せない。

けれど 他のメンバーは、慣れた光景なのか 動じていない様子。

「貴方が、納屋一杯のマグルのガラクタに悪戯したいもんだから そうしたんでしょう？！」

知らないとも思っていましたか？

貴方は、ホグワーツに通っていた頃から 変なガラクタに魔法をかけてばかりいたじゃないッ！

そのせいで、テッドやルーカスが巻き添えになってばかりだったじゃない……！」

妻の発言に 夫は、言葉が見つからないらしい。

「申し上げますが ハリーが、今朝 到着しましたよ？」

貴方が飛ばすつもりがないとおっしゃっていたあの車でね?!」

アーサーは、それを聞いて ポカンと しまっている。

ウィーズリー氏は、グルリと家の中を見回して やっと 眼鏡をかけた少年に気が付いた。

そして それと同時に 飛び上がってしまったっているようだ。

「なんと……… まあ ハリー・ポッター君かい？」

よく来てくれたッ!

ロンが、ホグワーツから戻って いつも君の事を………」

アーサーは、何が疑問が頭をよぎったのか 言葉を切る。

「貴方の息子達が、昨夜 ハリーの家まで車を飛ばして………連れてきたんですッ!

何か おっしゃりたいことは?」 モリーは、まるで 夫の心境を読んだかのように 怒鳴りつけた。

けれど まるで、その求められている答えとは違う物が頭の中に浮かんでいるらしい ウィーズリー氏は、“上手く んだのか?”と ウズウズしている。

でも 妻の目から火花が飛び散るのを確認して 口箆ってしまう。  
少年は、次の瞬間 モリーが、大きな食用蛙のように膨れ上がったのを見た。

「は 初めまして!えっと ハリー・ポッターですッ!

ロンとは、同じグリフィンドールで 友達です。

今日は、急に 来てしまって……… すいませんでした。

3人は、僕のためを思って車で駆けつけてくれただけなんです。

だから ロン達を叱らないで下さい」

ハリーの声は、裏返ってしまっているようだ。

そんな少年の様子に 一同は、呆気にとられながら 顔を見合わせ しまっている。

「何だか ハリーってば、恋人の家に来て 父親と鉢合わせた時みたいね?

ここでは、ロンが ハリーの恋人になるのかしらね?」オリビアは、

笑いを噛み締めながら 呟いた。

少女のその言葉に オリバーとパーシーや、双子も含めて 一同は、吹き出してしまっているようだ。

ハリーは、皆のそんな反応に 複雑そうな表情を浮かべて 肩をすくめてしまう。

どうやら この一件で 先ほどの険悪な空気は、一気に 一掃されたらしい。

「こらこら オリビア？」

ハリーが、困ってしまったているじゃないか」

アーサーは、そう言って 苦笑。

その言葉に 少女は、息をつきながら 肩をすくめた。

「で……… 大丈夫だったかい？」

何があったのかは、知らないが ずっと 連絡が取れないままだったのだから」

アーサーは、心配そうな表情を浮かべて ハリーの顔を、覗きこんできているようだ。

その言葉に ハリーは、“大丈夫です”と 首を振っている。

「心配かけて すいませんでした。」

それに こんな風に 僕なんかのこと 思ってくれて」ハリーは、複雑そうな表情を浮かべて 呟いた。

ハリーのそんな様子に 一同は、戸惑いを隠せない様子で 顔を見合わせてしまっているようだ。

「そりゃ 友達だし？」

心配して 当たり前でしょう？」

特に ウィーズリー家の皆さんは、本当に 優しいのよ？」

私だって 初めてこの家に、来た時は 今のハリーのような、心境になっていたもの？」オリビアは、苦笑しながら 言う。

その言葉に ハリー達は、不思議そうな表情を浮かべてしまっているようだ。

「だん？」



僕も 泊まりに来た 夜中のうちに 双子達に、布団詰めになれた  
りして 大変だった。

しかも 新学期早々 遅刻しかけたし。

駆け込み乗車で 何とか、間に合ったんだっただけ？」オリバーも、  
苦笑しながら 言った。

青年の言葉に 少女は、“乗り遅れたわよ”と 息をつきながら  
小声で呟く。

「しかも 遅れたのは、私とオリバーだけ。

その時、新入生だった ツインズを抱えて パーシーとチャーリー  
は、間に合ったけどね？

あの時は、本当に 参っちゃったわ？

だって その日は、何十年かに一度の入り口の整備の日だったから  
…… お互いに 顔を真っ青にさせちゃって」オリビアは、溜息を  
つきながら 言う。

その言葉に オリバーは、苦笑してしまっているらしい。

「ああ………それで 開かない入り口の前で 途方に暮れたんだっ  
け？

で ナイトバスで ホグワーツに向かう事になったんだよね？

ちょうど キャロンとキャロルが、通りかかってくれて スタンと  
連絡をつけてくれたんだ。

まあ 学校に着くなり マクゴナガル先生に、お小言をもらったな？  
前学期 注意はしたはずでしょうが って。

ダンブルドア先生には、大爆笑されちゃっていたけど」オリバーは、  
息をつきながら 呟いた。

ウィーズリーの面々は、そんな2人の会話に 顔を見合わせて、肩  
をすくめてしまっているようだ。

ハリーは、そんな家族の様子に 微笑を浮かべながら、見つめてい  
る。

「だから 置いてきぼりにした時の事は、ちゃんと 謝っただろう？  
まだ 根に持っていたのか？

何年経った　と　思っているんだよ」パーシーは、呆れたように溜息をつき、呟いた。

その言葉に　オリビアは、訝しげな表情を浮かべてしまっているようだ。

「言っておくけどね？」

私は、あの時　１時間も前に　駅に着いていたのよ?!  
なのに……約束の時間になっても　２人は来ないし。

他のみんなは、どんどん　ホームに、向かっていく様子を見つめてたんだから。

拳句の果てに　あんな窮地きゅうちに　陥って。

すごく　恥ずかしかったんだからね?!

まさか　大荷物を入れた　カーターを前に　立ち尽くすなんて。

何も知らない　マグルの人達には、クスクス笑われたし。

駅員らしき人達には、不審人物扱いよ?」少女は、神妙な表情を浮かべて　言う。

オリビアの言葉に　ハリーとロンは、その様子を思い浮かべてしま  
う。

そして　思わず　吹き出す。

双子も、そんな人の少年の样子に　笑いを噛み締めてしまっている。  
皆の様子につられて　オリバーとオリビアを除いた　メンバーも、  
苦笑してしまった。

そんな一同の様子に　２人は、顔を見合わせて　溜息をついてしま  
っているようだ。

ハリーは、そんな風に笑いながら　こんな素敵な家に遊びにこれて、  
幸せだと感じる。

## 第四章

隠れ穴での生活は、自分が当たり前だと感じてしまっていた  
プリペット通りのものと全く違っていた。

型どおりの行動を嫌っていた　ダーズリー夫妻と違って　ウィーズ  
リー家は、少し変でこで　度肝を抜かされることばかりなのだ。

隠れ穴に來た翌日の朝　初めて暖炉の上にある鏡で寝癖を直そうと  
すると　ハリーは、思わず飛び上がってしまう。

『だらしな過ぎ　シャツをズボンの中に入れるよ』と　鏡が大声を  
上げたのだから。

まあ　少年の驚きは、初めて　それを目にした　オリビアには、比  
べられないほど　甲高い悲鳴を上げたらしいが……。

そのせいか　隠れ穴に潜んでいる生き物は、彼女が訪問すると　ど  
こかピリピリしてしまっているらしい。

ロンの部屋は、台所から抜け出し　狭い廊下を通って、凸凹でジグ  
ザクに上へと続く階段を上り　ウィーズリー家の唯一の長女：ジニ  
ーの部屋（オリビアと相部屋）が、3番目の踊り場にあり　そこか  
ら　2・3つ踊り場を通り過ぎ　ペンキの剥げた扉の向こうにあっ  
た。

ハリーは、最初のその部屋に入った時　切妻の斜め天井に　頭をぶ  
つけそうになってしまったそうだが。

まあ　その驚きを吹き飛ばすように、部屋の中にあるオレンジ色  
の部屋に圧倒されてしまったが。

ロンの粗末な壁紙の隅から隅には、ご贔屓のチャドリー・キャノン  
ズ』という　クディッチチームのポスターが貼ってある。

勿論　そのポスターは、自分達に向かつて　手を振っており　鮮や

かなオレンジ色のユニフォームを着た 男女7人の魔法使い達は、  
箒を元気に手を振ってくれていた。

「僕 ここに、来て一週間経っているけど この家の方が素晴らし  
いところだと思うよ？」

だつて……こんなに 楽しいことばかりがあるんだもん」ある上  
天氣の朝・ハリーは、目を輝かせながら 言った。

「そうか？」

屋根裏お化けは、家の中が静かだと 決まつて 喚き出すんだぞ？  
しかも パイプを落としてくるしさ？  
フレッドとジョージは、変な実験をして 小さな爆発音とかが聞こ  
えてくるし。

それに パパの様子が恥ずかしいよ。

君に聞いているマグルの道具の話題で 大興奮しているんだから」  
そうは言っているものの ロンは、頬を真っ赤にさせてしまつてい  
るようだ。

「だけどさ？」

僕が、一番不思議なのつて やつぱり ロンのパパとママが、すご  
く 僕によくしてくれることなんだ。

普通の友達になら オリビアやオリバーみたいに 優しい感じだけ  
ど 何だか 僕 ロン達に申し訳なくなっちゃうくらいなんだ」

眼鏡を掛けた友人の言葉に ウィーズリーの少年は、首を捻る。

「うーん？」

最初のうちは、オリビアにも 今のハリーみたいにお節介とかして  
いたらしいよ？

この前 初めて オリビアが、孤児だつて聞いて………少し 納得  
できたけどさ？

しかも ハリーとは、従姉弟ときたんだから………驚きの連続さ」

「確かにネ？」

僕も 驚いちゃったよ」ハリーは、苦笑しながら 頷く。

「聞いた話じゃ………オリバーの方も、何だか 複雑な家庭環境ら

しいんだよ？

お父さんは、赤ちゃんの時に死んじゃったらしくて……今は、父方のお祖父さんとお祖母さんの家で生活しているらしいんだ」

その言葉に 少年は“お母さんは？”と 首を傾げた。

普通 父親が死んだだけなのなら 母親が、自分の子供を育てるのが当たり前なのだ。

その質問に ロンは、どこか肩をすくめてしまう。

「本人に直接聞いたんじゃないくて パパ達が話しているのを聞いたんだけどさ？

何か 元々 その結婚に反対されていたらしくて オリバーのお母さんは、旦那さんが亡くなった後 オリバーの妹と一緒に追い出されちゃったんだって。

オリバーは、跡取りだから って、置いてきぼり。

何か お祖母さんの方が、オリバーのお母さんのことを嫌っているらしい。

1人息子を、奪ったんだから 同じように奪ってやるって。

オリバーは、父親似で その妹は、母親似だったらしい」

「オリバーの家のことも、全然 知らなかった」

呆気にとられているハリーに ロンは“だよな？”と 息をつく。

「まあ オリバーは、今のハリーの頃こそ 窮屈で、家の中にいるのが嫌で堪らなかつたらしいけど ホグワーツに入ってから、パーシー達と一緒にいることで その鬱憤を晴らしているらしい。

勿論 クディッチの試合でも練習でも、そんな感じなんだろうけどさ？

今年も 扱かれるんじゃないか？」

「誰に??」

その声に ハリーとロンは、驚きを隠せず 飛び上がった。振り返ってみると オリバーとオリビアが、不思議そうな顔をしてしまっているようだ。

「食事の時間だってさ。

おばさんが、降りきなさい　って　声を張り上げているぞ？」

「そうそう　丁度　フレッドとジョージの実験の爆発音が響いているから　気が付いていなかったかもしれないけど」

2人の言葉に　ハリーとロンは、顔を見合わせて　キッチンへと向かう。

オリバーとオリビアは、途中で　パーシーを起こすために奇襲を掛けに行ってしまったらしい。

台所では、ウィーズリー夫婦とジニーが、すでにテーブルについている。

けれど　赤毛の少女は、眼鏡を掛けた少年の姿を確認した途端　オートミール用の深皿を、うっかりひっくり返して床に落としてしまい　カラカラと　大きな音が響き渡った。

彼女は、ハリーと同じ部屋に入ってくるたびに　物をひっくり返すことを繰り返してしまっているのだ。

兄は、そんな妹の様子に　不思議で堪らないらしい。

ジニーは、テーブルの下に潜ってお皿を手に顔を上げると　顔の色が、真っ赤な夕日のようになってしまうている。

こういう時は、何も気付かなかったフリをして　テーブルにつき　食事を始めるに限る。

「そうだ……　学校からの手紙が届いていたよ」

アーサーは、ニッコリと微笑んで　息子とその友人に、全く同じ封筒を手渡した。

「さすが　ダンブルドアは。」

彼は、気味がここに滞在していることをご存知なのだからね？」

ウィーズリー氏は、苦笑して　“お前達にもだ”と　パジャマ姿のまだ目が覚めていないおぼつかない足取りのフレッドとジョージに　声を掛けたようだ。

手紙には、去年ハグリットから受け取った物と同じく　9月1日に　キングズ・クロス駅の9と4分の3番線からホグワーツ特急に乗るようにと書いてある。

2年生は次の本を準備すること

基本呪文集（2学年用）

ミランダ・ゴッズホーク著

泣き妖怪バンジーとナウな休日

ギロデロイ・ロツクハート著

グールお化けとクールな散策

ギロデロイ・ロツクハート著

鬼婆とオツな休暇

ギロデロイ・ロツクハート著

トロールととろい旅

ギロデロイ・ロツクハート著

ヴァンパイアとバツチリ船旅

ギロデロイ・ロツクハート著

狼男と大いなる山歩き

ギロデロイ・ロツクハート著

雪男とゆつくり一年

ギロデロイ・ロツクハート著

「おいおい お前らも、ロツクハートのオンパレードじゃないかッ  
！」

フレッドは、自分のリストを読み終えたのか ハリーと論のリスト  
を覗き込んできた。

「新しい『闇の魔術に対する防衛術』の先生は、ロツクハートのフ  
アンの魔女だ！！」

そう断言するも 赤毛の青年は、母親と目が合ってしまった 慌てて

ママレードを手をしているトーストに塗りたくっているようだ。

同じ顔をしている兄の様子と裏腹に ジョージは、どこか両親に視線を送る。

「だけど この一式は、安くないぞ？」

ロックハートは、今やお茶の間じゃ人気の魔法使いだ。その上本を1冊買うにも、相当な金額になっちゃうんだから」

息子の不安そうな様子に モリーは“なんとかなるわ？”とどこか心配そうな顔。

「多分 ジニーの分は、みんなが使っていた物のお古だし。

制服の方も オリビアが、あまり使っていなかった セーターとかを持ってきてくれて 大助かりなんだもの」

ウィーズリー夫人の呟きを聞いて ハリーは“ああ、そうか”とジニーに視線を向けた。

「確か 僕らと1つ違いなんだっけ？」

同じ寮になれるといいね？」

眼鏡を掛けた兄の友人の質問に ジニーは、真っ赤中身の根元のところまで顔を真っ赤にさせて 何とか頷いているようだ。

けれど、バターの入ったお皿に肘まで突っ込んでしまったようだがちょうど パーシーが階段から転げ落ちてしまったこととそれを大爆笑のオリバーとオリビアのお陰で それを見たのは、ハリーだけだったらしい。

「皆さん おはよう。

いい天気ですね？」

何事も無かったように爽やかな挨拶をするグリフィンドール寮の監督生の様子には、弟妹も含め ハリーも吹き出すしかない。

「まったく…… あれくらいで 階段から落ちるかしら？」

オリビアは、不思議そうな表情を浮かべて 空いている椅子に腰を掛ける。

「いや 誰だって、驚くと思うけど？」

まさか、人が着替えている時に いきなり 部屋を押し入られるだ



なんてさ？

パジャマを着替えるだけなら未だしも、監督生バッジまでつけるの  
って おかしいけど」

友人2人の発言に 眼鏡を掛けた赤毛の青年は、訝しげな表情を浮かべ たった1つだけ空いている 椅子に座ったが その途端 弾けるように飛び上がった。

パーシーは、そして尻の下から ボロボロ下の抜けた毛ばたきのように見える何かを引っ張り出した。

その毛ばたきは、ちゃんと息をしているようだ。

「エロール！」

ロンは、ヨレヨレふくろうを兄から受け取り 翼の下から手紙を取り出す。

「やっと来た！！」

エロールじいさん……… やっと ハーマイオニーからの返事を持ってきたよ」

アーサーは、息子から年寄りな梟を受け取って 壁際にあるフカフカな古いタオルのある止まり木に寝かせる。

赤毛の少年は、嬉しそうに 封筒を破って、手紙を読み始めた。

ロン、ハリー？

お元気ですか。全てが何とか上手くいって良かったと思っています。手紙には、詳しく書いてありませんでしたが ロンがハリーを救い出した時 違法な手段を使っていなかったでしょうか？だって そんなことをしてしまえば ハリーも困った立場になってしまうのですから。

また お手紙を下さい。

だけど 別な梟を使った方がいいかもしれません。あの子にもう一回でも配達させたら、貴方の梟は、もうおしまいになってしまいかもしれないんだもの。

私は、今日も勉強を忙しくしています。

後 水曜日にマリーやアルと一緒に、新しい教科書を買いにロンドンへ向かうことになっています。

ダイアゴン横丁でお会いできませんか？

お返事を待っています では、また

ハーマイオニー

「ハーマイオニーってば マジかよ?!

休命中 勉強しているだなんてさ？」

ロンは、手紙を読み終えると 恐怖で顔が引き攣ってしまっているようだ。

「ちようどいいわ？」

私達も出かけて 彼方達の分を揃えましょう」モリーは、テーブルを片付けながら 言う。

その言葉に 皆は、顔を見合わせる。

その日 ハリーとロンとフレッドとジョージは、丘の上にあるウィーズリー家の小さな牧場に出かけた。

この草むらは、周りを木立に囲まれ 下の村からは、見えないようになっているそうだ。

そういう利点から 一同は、あまり高く飛ばないということを条件に クディッチで遊ぶことに。

本物ボールなどは、万が一の場合 ボールが逃げ出して、村の方に飛んでしまったら 説明のつけようがないし 元より 本物のボールは、ウィーズリー家にはないのだが……。

一同は、ボールの代わりに 果樹園に生っていた林檎でキャッチボールをする。

フレッドとジョージは、さすがビーターを務めていることもあって 一撃に重みがあった。

まるで ブラッチャーを投げつけられているような感覚なのだ。

力技のフレッドは、コントロールに自信がない様子だったが それをジョージが補っているらしい。

そして ジョージは、力が籠っていないが そのコントロールは、神業そのもののようで 思い通りに投げてくるので、受け止める方が大変なめになってしまう。

ロンは、キャッチするのが何気に上手く 自信さえついたら いいプレイヤーになるかもしれない。

その後 みんなでかわりばんこで ハリーの『ニンバス2000』に乗った。

やはり ニンバス2000は、圧巻だ。

ロンが使っている中古の箒『流れ星』だと そばを飛んでいる蝶に  
さえも、追いつかれてしまったのだから。

「あゝあ………… やっぱり パーシー達も、一緒に加わればいいのに」  
ロンは、面白くなさそうに 呟く。

赤毛の弟の言葉に フレッドとジョージも “ ” その通りだ “ ” と  
どこか訝しげな様子。

「パーシーの奴 忙しいことを理由に、断ったんだぜ？」

オリバーとオリビアだって パーシーを手伝っているみたいだしさ？  
一体 何をやっているんだろうな？」

「まあ オリビアは、運動音痴だから 無理にしてもさ？」

だけど あのオリバーがクディッチをすることを断るだなんて 何  
か、波乱の予感だ」

ウィーズリーの双子の会話を聞きながら ハリーも、疑問の思う。

パーシー達を見るのは、食事の時くらいなのだから。

「やつこさん等は、一体 何を考えているんだかな？」フレッドは、  
訝しげな表情を浮かべて 言った。

話によれば ハリーがダーズリー家から救出される前日に、統一試  
験の結果が届いたそうだ。

「パーシーってばさ？」

12教科とも全部パスして 『12ふくろうつ』だったのに…………二  
コリともしなかったんだぜ？」

その言葉に 少年が、首を捻っていると ジョージは “ 『ふくろうつ』  
ってのはだな？ ” と 説明してくれる。

「15歳になったら受ける試験で 普通魔法レベル試験……………つま  
り 頭文字をもじって『O・W・L』ってわけ」

それを聞いても ハリーにとっては、ちんぷんかんぷん。

「確か ビルも12じゃなかったっけ？」

下手したら この家から また 首席が出るかもしれないぞ？」

「ビル って 一番上のお兄さんだったよね？」

去年 ハグリットがコッソリ育てよいとしていたドラゴンの赤ちゃん

んを引き取ってくれた チャーリーの2つ違いのお兄さんだっけ？」

ハリーの言葉に 3人は“ ” “ そうだよ ” “ ” と 同時に頷く。

「ビルもチャーリーも、ホグワーツを卒業してしまっていてね？」

チャーリーは、ルーマニアでドラゴンの研究をしているし ビルは、グリンゴッツ銀行で働いているんだ」

「残念だったな？」

僕らがハリーを連れて家に戻ってくる前に 急な要請で、休暇を返上してエジプトに戻っちまったらしい」

「あれ そうだったの？！」

久しぶりの家だから 昼近くまで 眠っているのかと思ってた。

それが ミュリエル伯母さんの家にも、顔を出しているのかと」

弟の発言に フレッドとジョージは、呆れ気味で 溜息。

「いくら あのミュリエルに気に入られているからってさ？」

休み中にまで 顔を出しに行くほど 慕っているわけでもないだろう？」

「そうそう あのミュリエルだぞ？」

僕らは、会う度 文句を言われっぱなしだしさ？

仕事があれば 間違いなく リーフ達と飲みに行っているからだ」

双子の兄2人の発言に 弟は、納得しているらしい。

「そっぴや パパもママも、どうやって 学用品を揃えるお金を用意するのかな？」 ジョージは、ふと 思い出したように呟いた。

同じ顔をした弟の言葉に フレッドも “ だよな？ ” と 深く溜息をついてしまっているようだ。

「ロックハートの本を5人分だもんな？」

ジニーだって さすがに ロープや杖やら、新しいのが必要になつてくるだろうしな？

ブラウスとスカートは、オリビアのお古が 新品並みだから ジニ

ーも、文句の言いようがないみたいだけど」

それを聞いて ハリーは、黙り込んでしまう。

親友とはいえ 他人の家庭の事情に関する会話が飛び交う中にいる

のは、居心地がいのだから。

ロンドンにあるグリンゴッツの地下金庫には、両親が残してくれた財産がかなり残っていた。

勿論 それは、魔法界でしか通用しない財産だ。

詳しくは知らないが ある魔法使いが経営している銀行を使えばマグルのお金と交換してくれるらしいが。

けれど この事を、ダーズリー夫妻に知られるつもりなどない。

彼等は、確かに 魔法に関することを恐れているかもしれないが山積の金貨ともなれば 目の色を変えるかもしれないのだから。

これは、2人の息子である ダドリーのお墨付き。

ある一軒家では 1人の少女が、嬉しそうな表情を浮かべて 電話越しに 会話していた。

「OK」？

じゃあ みんなも、ダイアゴン横丁で 落ち合うのね？」

話している少女は、チョコレート色の長い髪の毛をクルクルと回しているマリーベル・ウィルソンだ。

「時間」？

ダイジョーブだって！

去年だって 迷わなかったんだから。

まあ 1人にしたら 危ないかもしれないけど。

大人数なんだから 大丈夫なんじゃない？」少女は、苦笑しながら言う。

その言葉に 隣に立っている少年は、神妙な表情を浮かべてしまっている。

「うっわあッ！

ハーマイオニー……さつきから アルが、睨んできているの。

方向音痴なのは、本当の事なのに……本人は、全く持って 自覚しないんだものね？

本当に 困っちゃう。

図書室では、迷わないくせに ね？」

マリーベルは、クスクスと笑いながら 電話の相手「ハーマイオニー・グレンジャーと 楽しそうに 話していた。

そんな姉の様子に アルデルト・ウィルソンは、溜息をついてしまっているようだ。

「いいの?!」マリーベルは、嬉しそうな表情を浮かべて 叫ぶ。姉の様子に アルデルトは、不思議そうな表情を浮かべている。

そんな弟の様子に マリーベルは、ニツコリと微笑み 受話器をずらす。

「ハーマイオニーのご両親が、ダイアゴン横丁まで 一緒に 送ってくれるって!

帰りも 荷物が多いだろうから 一緒にどうですか ですって。受けるわよね?

去年は、去年で…… ベネディクトが、車の鍵をどこかでなくしたりして バスで帰る羽目になって 大変だったし」マリーベルは、息をつきながら 言う。

その言葉に アルデルトは、苦笑しながら 頷いた。

マリーベルは、そんな弟の反応に 嬉しそうな表情を浮かべて ハーマイオニーに 話し掛けているようだ。

「OKよ?

じゃあ 近くの公園で待っているわね?

目立つ所だから 分ると思うわよ?

王立公園の場所は、わかるかしら…… そこから 南に直進して 小さな礼拝堂があつて……そこんだけど……ん? へえ…… ハーマイオニーの両親が知っているんだ?」

マリーベルは、苦笑しながら 電話を続けている。

そんな少女の様子を アルデルトは、微笑みながら 見つめていた。後ろを振り返ると 祖父母が、苦笑しながら 覗き込んでいるようだ。



その視線を受けて 少年は、微笑みながら 頷く。

「ふうん 世界は、狭いわね？」

まさか 貴女の両親が、昔 このへんに住んでいたなんて。  
でも まあ？

同じ顔をしているのに、出逢うのに 13年も掛かったことがある  
人達を知っているんだけどね？」

マリーベルの呟きに 受話器の向こうからは、不思議そうな声が。  
アルデルトは、息をついて “代わって？”と 姉に促す。

「あ…………ハーマイオニー？

うん マリーから聞いたよ。

ダイアゴン横丁まで送ってくれるんだってね？

ロン達には、一緒に 買い物に行けるって？

そう……………わかったよ」

チョコレート色の髪をした少年は、苦笑しながら スラリと伸びて  
いる足をその場で組む。

その様子を窺っている姉は、どこか首を捻っていた。

しばらくして 電話が終わったらしく アルデルトは、受話器を置  
いて どこか 難しい顔をしてしまっているようだ。

そんな弟の様子に マリーベルは“どうかした？”と 声を掛ける。

「まさか 厄介なことになっちゃっているとか？

だって あのフレッド達が、ハリーをダーズリー家から救出したん  
でしょう？

ところで 何で……………ハリーと連絡が取れなかったのかは、聞けた？  
本人から聞くのが、一番なんだけど」

「何だか 今年の水グワーツ、一波乱起こるかも。  
邪魔が入らなかつたら、いいんだけどね？」

ハリー達は、水曜日の朝 早い時間帯から起こされた。

今日 みんなで ダイアゴン横丁に向かうのだ。

一同は、ベーコン・サンドイッチを1人当たり 6個ずつ一気に飲み込み コートを着込む。

そして 暖炉の前に集まると モリーは、暖炉の上から植木鉢を取って 中を覗いていた。

「アーサー？」

大分 少なくなってしまうているわ？

今日 買い足しておかないといけないわね？」

その言葉に ウィーズリーの面々は、顔を見合わせてしまっているようだ。

けれど 気を取り直したかのように ウィーズリー夫人は、“さて？”と 皆の顔を見回す。

「お客様からどうぞ？」

ハリー……………お先にね？

オリバーとオリビアは、その後に続いて頂戴？」

そう言って モリーは、ニツコリと微笑み 少年を暖炉の中に立たせて、鉢を差し出した。

けれど 眼鏡を掛けた少年は、どうしたらいいのかわからず すぐ前に並ぶ ロンに助けを求めているようだ。

そんな友人の様子に 赤毛の少年は“そういえば”と 肩をすくめてしまう。

「ハリーは、<sup>フルーパウダー</sup>煙突飛行粉を使ったことがないんだ。

ごめんよ ハリー？

説明するのをすっかり忘れてたよ」

「その鉢の中にある緑色の粉末は、『フルーパウダー煙突飛行粉』って言ってね？魔法界の各家庭には、魔法省による正式な手続きを踏んだ ネットワークが存在しているの。」

で ほとんどは、暖炉とパウダーを使うことで ネットワークの繋がっている場所に移動することが出来るのよ」

オリビアの説明を受けても 今のハリーは、焦りが絶好調になってしまっている。

「いいな〜？

ハリーってば 一番先に、やらせてもらえるだなんて。

僕 つつも 最後の方なんだよ？」

ロンは、そう言いながら 羨ましそうな表情を浮かべていた。

友人のその言葉に ハリーは、困惑を隠せない様子だ。

双子とジニーも、期待の目を、眼鏡を掛けた少年に向けている。

そんな視線に ハリーは、尚更 不安を隠せない。

「ハリー……………いいかい？

発音を はっきり と 言わないと いけないよ？

間違ってしまったら とんでもない所に、飛ばされてしまうからね？

行き先を言うと同時に この粉を暖炉の中で投げつけるんだ」アー

サーは、真剣な表情を浮かべて 言った。

その言葉に ハリーは、思わず 息を吞んでしまっているようだ。

ウィーズリーの面々は、少年の心境に 気がついてしている様子はないが、オリバーとオリビアは、心配そうな表情を浮かべて 顔を見合わせている。

「本当に 間違えるんじゃないぞ？

前に オリビアが、とんでもない所に 飛ばされたからな？」オリバーは、苦笑しながら 言う。

その言葉に 少女は、訝しげな表情を浮かべて オリバーを、蹴りつけた。

「ちよっと スペルを間違えただけじゃない！

それに オリバーも、言えないでしょう？

貴方だって あっちに行っちゃった。

見事 私の上に落っこちて……… 変な魔法使いには、追い掛け回されるし 出口は、わからなかったし。

本当に ホッグズ・ヘッドの主人がいなかったら……… 大変だったのよ？」オリビアは、溜息をつきながら 言う。

オリバーは、少女の攻撃に 苦悶の表情を浮かべてしまっている。そんな2人の様子に 一同は、顔を見合わせながら 苦笑するしかない。

「だが 去年は、どうやってダイアゴン横丁まで向かったんだい？ 確か ハグリットが、君を迎えに向かったらしいが」

ウィーズリー氏の質問に ハリーは、首を捻った。

「確か 地下鉄に乗りました」

眼鏡を掛けた少年の言葉に オリビアは、思わず吹き出してしまっているようだ。

「さずかし 目立った旅になったんじゃないの？

だって お世辞にも、あの身体の大きさでしょう？」

エメラルドの髪をした魔女見習いの言葉に ウィーズリー夫妻も、どこか顔を見合わせてしまっている。

他のメンバーは、その光景を頭に浮かべたのか 必死で笑いを堪えているらしい。

「地下鉄というと？」

友人に聞いた話なんだが？

エスカペーターというものが、あるのだろう？それは、一体 どんな物なのかね？」

「おじさん……… エスカペーターじゃなくて、エスカレーターですよ」

オリバーは、苦笑しながら 訂正を入れた。

息子の友人の言葉に ウィーズリー氏は、不思議そうな表情を浮かべてしまっているようだ。

「それは、そうと？」

一体 どうやって……………「アーサーッ！」

夫が、またマグルの話題に興味を持ち出したので モリーは、その前に活を入れる。

「その話は、買い物から帰ってきてても出来るでしょう？」

ハリー……………フルーバウダー煙突飛行粉を使うとね？

そのマグルの移動手段を使わなくても、ずっと 早いのよ？

にしても 困ったわね？

まさか 一度も コレを使った事がないだなんて。

1度くらいは、あるんじゃないか と 思っていたのだけど」

モリーは、そう言いながら 不思議そうな表情を浮かべて 溜息をついた。

ウィーズリー夫人の言葉に ハリーは、“すいません”と 悲しそうな表情を浮かべて 肩をすくめてしまっているようだ。

「魔法使いの事とかは、去年 知ったばかりだったし。

まだ 知らないことも、たくさんあるんです」ハリーは、悲しそうな表情を浮かべて 呟いた。

そんなハリーの様子に モリーは、戸惑いを隠せない表情を浮かべてしまっている。

「まあ、簡単さ。

ただ 粉を持って 行きたいところの名前を、叫んだら いいんだからさ？

やってみたら、なんでもないよ」

フレッドとジョージは、ニッコリと微笑みながら “ 僕たちを見ているんだ ” と 鉢の中からキラキラと光る粉を一つまみして取り出し ハリーの前に立った。

そして そんな双子の行動に、何か気が付いたのか パーシーによつて、ハリーは 暖炉から、引つ張り出され 離される。

ウィーズリーの双子は、その様子を見届けて 粉を暖炉の炎に、投げてから “ ダイヤゴン横丁！” と叫ぶ。

次の瞬間 暖炉の中に ゴー という 音と共に 真っ赤だった炎は、エメラルド・グリーンに変わり 煙が消えた時には、双子の姿は見えなくなってしまっている。

その様子に ハリーは、驚きを隠せない様子で 呆気に取られてしまっていた。

「じゃあ……次は、ハリーだ。

さあ あの子達と同じように、やってごらん。

いいね？ダ・イ・ア・ゴ・ン・横・丁だよ？」

アーサーは、そう言って ニッコリと微笑を浮かべていた。

ハリーは、その言葉に 息を呑みながら、頷いているようだ。

「肘を引っ込めていた方がいいよ。

それに 目を閉じてね？

煤が、顔中に飛びかかってくるんだからさ？

それに、モゾモゾ動かないこと。回転に身を任せていなかったら

とんでもない暖炉に振り落とされちゃうことになるんだからさ？」

ロンは、真剣な表情を浮かべて 忠告。

「だけど 慌てては駄目よ？

あまり急いで外に出ようとしないでね？

先に向かったフレッドとジョージの姿が見えるまで 待つのだよ？」

色々な言葉を頭の中に叩き込み ハリーは、煙突飛行粉の入った八

の中に手を突っ込み 一つまみを取って、暖炉の前に進み出る。

深呼吸して、粉を炎の中に投げ入れ、中に入った。

炎は、暖かいそよ風のように 熱くないようだ。

そして、意を決したかのように 粉を掴み、暖炉の中で 叫ぼうと

口を開く。

けれど、その途端に 嫌というほど熱い灰を吸い込んでしまった。

この結果 ハリーは“ダ………ダイア………ゴン横丁ッ！”と

咽ながら叫んだようだ。

その様子に 見守っていた面々は、顔を真っ青にさせて 顔を見合わせてしまう。

「今 ハリー、ちゃんと 発音できていなかったな。

経験から、言うところ あつちに 行っちゃったかもしれない。

向こうは、色々と 闇の魔法使い関係も見ようだから 厄介なのに」オリバーは、神妙な表情を浮かべて 呟いた。

その言葉に ウィーズリー夫婦は、心配そうな表情を浮かべて 顔を見合わせてしまっているようだ。

「そんなッ！

どうするの？！

ハリーは、まだ この世界のことを、何も知らないんだよ？！

しかも 屋敷しもべ妖精の、警告もあるし 危ないかもしれないじゃないか！」ロンは、泣きそうな表情を浮かべて 叫ぶ。

赤毛の少年の言葉に 他のメンバーも、心配そうな表情を浮かべている。

「私 ハリーを追いかけます！

ウィーズリーの人達が、行ったら 変に思われてしまうかもしれないかもしれないけど 私だったら また 迷い込んだ事で 納得されるでしょうッ！」

オリビアは、そう言って 自分のポケットから、粉を取り出し 暖炉の中から、消えていった。

そんな少女の姿を見つめて 一同は、神妙な表情を浮かべて 顔を見合わせる。

「とにかく 私達も、向かおう。

次にやってこない 私達に フレッドとジョージが、心配しているはずだ。

変な行動を起こしてしまう前に……」アーサーは、真剣な表情を浮かべて 呟く。

父の言葉に ウィーズリーの子供達は、心配そうな表情を浮かべてしまっているようだ。

「何だか 今年も、何か 起きそうだな？

最初は、てつきり クディッチ関係で、ハリーに脅しをかけてきた

のか っ て 思 っ て いた け ど。

話 を 聞 い て い る と や っ ぱ り さ ？

それ だけ じゃ、 ない よ う だ し」 オ リ バ ー は、 神 妙 な 表 情 を 浮 か べ て 呟 いた。

友 人 の 言 葉 に パ ー シ ー は、 呆 れ た 表 情 を 浮 か べ ず れ た 眼 鏡 を、 直 し て い る よ う だ。

「お 前 の 思 考 の 中 は、 ク デ イ ッ チ だ け な の か ？

こ の 前 の、 O・W・L の 結 果 良 く な っ た ん だ ろ う ？

将 来 教 師 に な り た い っ て 考 え て い る 奴 が、 変 な こ と 考 え る な よ。

一 応 生 徒 に な る か も し れ な い ん だ か ら さ ？

連 中 も 口 に は、 出 し た く な い け ど」

赤 毛 の 青 年 は、 そ う 言 っ て オ リ バ ー の 額 を、 小 突 く。

パ ー シ ー の 様 子 に 青 年 は、 苦 笑 し な が ら 暖 炉 の 中 で 消 え て い く ウ イ ー ズ リ ー の 家 族 を 見 つ め 真 剣 な 表 情 を 浮 か べ て い る。

「オ リ ビ ア が、 追 い か け た か ら 大 丈 夫 だ と は、 思 う け ど。

そ れ に 今 日 は、 ハ グ リ ッ ト が あ そ こ に 向 か う ら し い っ て 聞 い た か ら ね ？」 青 年 は、 息 を つ き な が ら 言 っ た。

オ リ バ ー の 言 葉 に パ ー シ ー は、 訝 し げ な 表 情 を 浮 か べ て し ま っ て い る よ う だ。

「と に か く 話 は、 後 に し よ う ？

ま ず は ダ イ ア ゴ ン 横 丁 に、 行 か な い と」

パ ー シ ー は、 息 を つ き な が ら 粉 を 片 手 に、 暖 炉 の 中 へ と 入 っ て い く。

オ リ バ ー も、 そ の 後 に 続 き 持 参 し て き た 粉 を 取 り 出 し ダ イ ア ゴ ン 横 丁 へ 向 か う。



まるで 巨大な穴に渦を巻いて吸い込まれるような感覚だった。  
耳は、聞こえなくなってしまうのではないかと 思えるくらい  
高速で回転しているようだ。

目を何とか開けようと努力したが 周りに立ち込めている 緑色の  
炎で気分が悪い。

肘は、何度も何かにぶつかってしまい シツカリと引く。

回  
る  
:  
:  
:  
:  
:  
回  
る

今度は、冷たい手で頬を打たれた感じがする。

眼鏡越しに目を細めてみると 輪郭のぼやけた暖炉が、次々と目の  
前を通り過ぎていく。

中には、その移動中の少年と目が合ってしまったらしい 幼い女の  
子が近寄ってきたが すぐに違う暖炉へと移ってしまう。

胃の中では、先ほど詰め込んだ ベーコン・サンドイッチが、ひっ  
くり返っているらしい。

まだ 終わらない移動に 早く終わればいいのにと 諦めたように  
目を閉じた。

ふと その思いが通じたのか 前のめりに倒れてしまったようだ。  
冷たい石に顔面から突っ込んでしまい 眼鏡のレンズが砕けたのを  
自覚する。

頭が朦朧とするのと痛みを感じながら 顔が煤だらけになっている  
ことに気が付いた。

辺りを見回してみるのが 誰もいないようだ。

けれど　ここは、一体　どこなのか？

それに　何で　先に向かったはずのフレッドとジョージがいらない？

フルーバウダー

煙突飛行粉を使ったネットワークを通じてきたのだから　ここは、

魔法使いの家の倉庫か　店なのだろう。

暖炉は、薄明かりの中にあり　並んでいる物といえば　ホグワーツ  
の必要なりストに載りそうもない物ばかり。

手前のショーケースには、クッションに載せられた　『しなびた手』  
と血に染まったランプに何かの義眼がギョロギョロと目を剥いて  
いる。

壁からは、邪悪な表情の仮面が見下ろし　カウンターには、人骨が  
まばらに山積に。

天井からは、錆付いた棘だらけの道具がぶら下がっていた。

埃で汚れたウィンドーの外に見える狭く暗い通りから　ここは、絶  
対にダイアゴン横丁ではないようだ。

本能で　ハリーは、一刻も早く　ここから出なければならないと自  
覚する。

何とか出口を見つけ　コツソリとそこに向かおうとしたが　ガラス  
の向こうから2つの影が見えた。

その1人は、こんな無様な姿を見せたくない相手　ドラコ・マルフ  
オイだ。

少年は、急いで見回し　暖炉のすぐ前の脇に大きな黒いキャビネツ  
ト棚を見つけ　その中に入り込む。

それと入れ違いに　マルフォイが、自分と瓜二つな男を連れて　店  
の中に入ってくる。

男は、間違はなく　父親：ルシウス・マルフォイなのだろう。

息子と同じ血の気の無い顔に尖った顎……………そして　冷たく暗い灰  
色の目をしているのだから。

マルフォイ氏は、陳列の商品に何気なく目をやり　店の奥まで入っ  
てきた。

「ドラコ……………一切　触るんじゃないぞ？」

後で 競技用の箒を買ってやるから 大人しくしている」男は、カウターのベルを鳴らし 息子に向かって声を掛けたようだ。

父の言葉に プラチナブロンドの少年は、面白くなさそうな顔。

「父上………そんな量の選手に選ばれなきゃ 意味がないじゃないか」

こんな子供のように拗ねたドラコの様子を見たことがない。

「ハリー・ポッターなんか 去年 ニンバス2000を貰っていた。グリフィンドール寮チームでプレーが出来るよう………ダンブルドアが、特別許可を出したんだよ。

あいつは、そんなに上手いわけでもないのに………単に 有名人っただけで。

額に馬鹿な傷があるから 有名なだけなのに」

少年は、面白くなさそうに 髑髏の陳列棚を覗いている。

「………どいつもこいつも、ハリーがかっこいいと思っているんだよ。

マリーだって アルトだって、同じグリフィンドール寮に組み分けされたもんだから そう思ってるんだ。

額に傷、手に箒の素敵なポッター ってさ？」

息子の愚痴に ルシウスは、“何度目だろうな”と 溜息をつく。

「お前は、ホグワーツから戻ってくるなり ずっと 同じことを言っているじゃないか」

そして、ふと マルフォイ氏は、息子を視線だけで 押さえつけるように睨みつけた。

「あのウィルソンの双子と親しくすることは、勧められないぞ？

いくら あの2人の父親が、ナルシッサの弟だとしてもだ。

それに ハリー・ポッターを好きではない という 素振りを見せるといのは、何と言うか 賢明ではない。

特に 今は、大多数の者が彼を、闇の帝王を打ち消した 英雄ヒーローとして扱っているのだから。

だが その後は………やあ、ボージン君」

ふと 猫背の脂っこい髪をした 小太りな男が、カウンターの向こうから現れたようだ。

「マルフォイ様 また、おいでいただきまして嬉しゅうございます」  
ボージン氏は、髪の毛と同じくらい脂っこい声を発す。

「共栄至極でございます。」

それに 今日は、若様まで…………… 光栄でございます。

手前共に 何のご用件で？

本日入荷しました品をご紹介しますでしょうか？

お値段の方は、お勉強させていただき…………… 「買いに来たのではない」

店主の言葉を遮って ルシウスは、言葉を続ける。

「ボージン君 今日は、買いに来たのではなく 売りに来たのだよ」  
その言葉に ボージン氏の顔からは、笑いが薄らぐ。

「当然聞き及んでいると思うが 魔法省が、抜き打ちの立ち入り調査を仕掛けることが多くなってるね？

私も、少しばかり ここに載っている物品を持っていますね？

もしも 役所の訪問を受けた場合 都合が悪い思いをするかもしれない」

マルフォイ氏は、そう話しながら 内ポケットの中から、羊皮紙の巻紙を取り出し 猫背の男に読めるように広げた。

「ですが 魔法省が、貴方様にご迷惑をおかけするでしょうか？」

その言葉に ルシウスの口元は、“魔法省の訪問は、まだない”とニヤリとしたようだ。

「マルフォイ家の名前は、名前は変わったにしても その血筋は、古き時代から連なるもので、それなりの尊敬を勝ち得ているのだからね？」

だが 役所は、富に小うるさくなっているのだよ。

しかも マグル保護法の制定の噂もある。おそらく あの風<sup>ふう</sup>つたかりのマグル臍<sup>へし</sup>員である アーサー・ウィーズリーが、糸を引いているのだろっか」

それを聞いて ハリーは、熱い怒りがこみ上げてくるのを感じる。  
ふと “父上ッ！”と ドラコの声が聞こえてきた。

「父上……これは、一体 どのようなもののですか？」

その示されている品に ボージンは、“ああ 『輝きの手』でござ  
います”と 目を輝かせているようだ。

「蠟燭を差し込んでいただきますと 手を持っている者にしか見え  
ない灯りが点ります」

つまり 泥棒や強盗には、打ってつけの品らしい。

その後 再び 大人同士の交渉が始める。

ドラコは、そんな会話に面白くないのか 店内を歩き回るので、ハ  
リーにとって 気が気でない。

ふと プラチナブロンドの少年は、絞首用の長いロープの束の前で  
立ち止まり しげしげの眺め 豪華なオパールネックレスの前に  
立てかけてある説明ガキを読みながら ニヤニヤしていた。

ご注意 手に触れないこと

呪われたネックレス これまでに19人の持ち主のマグルの  
命を奪った

ドラコは、そのまま向きを変え ちょうど目の前にあるキャビネッ  
ト棚に目を留めたようだ。

前へと進み 手を掴もうと 手を伸ばす。

その時 息を殺している ハリーの背後の暖炉から 小さな悲鳴が  
聞こえてきた。

店にいるメンバーは、その声に 驚きを隠せない様子で 顔を見  
合わせてしまっているようだ。

「あたたた…… 本当に ここって どうして ホコリ臭いんだろ  
う」オリビアは、溜息をつきながら 呟いた。

エメラルドの髪をした少女の姿を確認して ボージン氏は、訝しげ

な表情を浮かべてしまっているようだ。

マルフォイの父親は、少女にカウンターの前に出している品が見えないよう 奥へと押しやってしまったらしい。

オリビアは、ハリーの姿を確認すると 彼等に見えないように 立ちほだかり 棚から出るように指示する。

「アンタ また 発音を間違えたのかい？」

まったく 本当に わざとじゃないんだろうね？

出口は、何度も来ているんだから わかっているだろう？」猫背の

男は、訝しげな表情を言つて オリビアに言う。

ルシウスは、眼鏡を掛けた少女の姿を確認して どこか訝しげな様子。

「確か 君は、去年から グリフィンドール寮の監督生を勤めているお嬢さんだったかな？」

その質問に オリビアは、難しい表情を浮かべて “そうですけど？”と 振り返った。

「噂は、聞いている。

マグル出身者でありながら 他の純血の子供達を押さえ 上位な成績を保持しているそうだな？

うちの息子も、同じ学年のグリフィンドール寮のマグル出身のお嬢さんに全科目の試験で負けてしまっているようだし。

しかも エドワードの娘には、魔法薬で だいぶ差をつけられてしまっているようだからな？

どこぞの教師が、鼻屑にするにも 無理があるだろう」

その言葉には、どこか棘があるようだ。

「この頃は、魔法家系でもない者に優越な立場を与えるなど ホグワーツも落ちたものだ」

ハリーは、怒りを覚え ドラコに視線を向けてみると 恥と怒りの混じった 奴の顔に 意地悪な笑みが見える。

「Ms・シフォン………これからも 魔法界で生活するつもりなのならば あまり でしゃばらないことだ。

でなければ あの時 助かったことこそが間違いになってしまっただろうからな？

それとも 早く ご両親に会いたいのかな？

仇を取るにも 厄介なことになってしまっただろうし」

姿を隠している少年とプラチナブロンドの少年は、意味がわからない顔をしている様子だったが ボージンは、何かを思い出したのか ニヤニヤしていた。

オリビアは、しばらく黙っていたが すぐに顔を上げて “ご忠告、感謝いたします” と 微笑んだ。

「ですが 彼方方の言葉で表すのならば 私は、場を弁えておりませんので お約束出来かねます。

それに 私は、

恩を仇で返すつもりはありません。

全ては、真実を明らかにする為 尽力するだけですから」

エメラルドの髪をした少女は、そう言い残すと ” それでは、失礼します” と 自分のマントで見えなくしている ハリーと一緒に 店を後にする。

「おお お前ら、こんなところにおったのか」

店を出ると そこには、ルビウス・ハグリットが 心配そうな表情を浮かべて 立っていた。

その姿を確認して ハリーは、安堵の息を漏らしているようだ。

「ハグリット……… ちょうど良かったわ？」

ハリーが、見えないように 歩いてくれる？

私だけだと ちよつと 限界かもしれないの」オリビアも、胸を撫で下ろしながら 言う。

その言葉に ハリーは、不思議そうな表情を浮かべてしまっているようだったが ハグリットは、何か 気が付いたようで 神妙な表情を浮かべているようだ。

眼鏡を掛けた少年の様子に気が付いたのか ハグリットは、真剣な表情を浮かべて 少年の顔を覗きこんだ。

「ここは、『夜の闇横丁（ノクターン横丁）』」。

『例のあの人』が、本拠地としていた 街でもあるんだ。

だから あの魔法使いが滅んでからも 崇拜していた連中が、集まる場だ」

ハグリットの言葉に ハリーは思わず 息を吞んでしまう。

そんな少年の様子に オリビアは、小さく溜息をついてしまっているようだ。

「下手したら 貴方を殺す事で……… 『あの人』を超えられる っ て 襲い掛かってくるかもしれないしね？」少女は、息をつきながら 言う。

その言葉に ハリーは、不安そうな表情を浮かべ ハグリットとオ



リビアを、見ているようだ。

「にしても オリビアも、無茶な事をするな？」

お前さんは、毎回 こっちに 来ちまっているんだろっから……

他の誰よりも 怪しまれないのは、確かかもしれんが。

監督生らしからねえ 行動なんじゃねえか？」ハグリットは、苦笑しながら 言った。

ハグリットのその言葉に オリビアは、肩をすくめてしまっているようだ。

そんな少女の様子に ハリーは、思わず 苦笑してしまう。

「けど どうして、僕らがここにいる って？」

ハリーは、そう言っ て 不思議そうに 首を傾げた。

「ああ アーサー達に聞いたんだ。

おんれが、今日 ここに来る事を、オリバーに 話していたからな？  
ちようどいい っ て 考えたんだろう。

アーサーやモリーが、下手に動き回ると 厄介だろうから」

ハグリットは、苦笑しながら 言う。

どうやら ハリーが、ダイアゴン横丁に着いていない事を確認し  
すぐに ウィーズリー家の皆が 事情を説明してくれていたらしい。  
その話を聞き ハリーは、申し訳なさそうな表情を浮かべて 肩を  
すくめてしまった。

少年のそんな様子に ハグリットとオリビアは、戸惑いを隠せない  
様子で 顔を見合わせる。

「ところで あの店に、出たんだな？」

何か 危ないもんには、触れていないか？」ハグリットは、神妙な  
表情を浮かべて 呟いた。

「うん 触ってない。

だって どこなのかも、わからなかったし。

何か 店の中にあるもの、全部 嫌な感じがしたもん」

ハリーは、真剣な表情を浮かべて 頷く。

オリビアも、その横で 息をつきながら、頷いているようだ。

「それは、初めて あの店に迷い込んだ時に 同じ感覚がしたわ？  
しかも 全部 不気味な品物ばかりなんだもの…… マグルが呪  
われて 不振な死に方をした とか 注意書きもあったし」

2人の言葉に ハグリットは、満足そうな表情を浮かべて ハリー  
とオリビアの頭を、優しく撫でてくる。

「店の中に マルフォイ父子がいてね？」

帰り際 嫌味と警告をされたわ」オリビアは、訝しげな表情を浮か  
べて 言った。

その言葉に ハグリットは、険しい表情を浮かべてしまっているよ  
うだ。

ハリーは、そんな2人の様子に 不思議そうな表情を浮かべて、首  
を傾げてしまっている。

「ルシウス・マルフォイか……」。

で ハリーの顔は、見られていねえだろうな？」ハグリットは、真  
剣な表情を浮かべて 言った。

その質問に オリビアは、息をつきながら 頷く。

「ちょうど 親子の死角になっていたから。

で すぐに ロープで、遮った。

まだ ハリーの身長が、高くなくて 助かったわ？

ギリギリだったんだもの。歩き方変だったから ドラコには、笑わ  
れていたようだし」

オリビアの言葉に ハリーは、複雑そうな表情を浮かべて 肩をす  
くめてしまっているようだ。

「気にすんなよ ハリー？」

少しずつだが お前も、成長しているんだ。

去年 初めて会った時よりも、でかくなってるぞ？

服だって 小さくなったり しているんじゃないか？」ハグリッ  
トは、微笑みながら 言う。

その言葉に ハリーは、嬉しそうな表情を浮かべているようだ。

オリビアは、そんな少年の様子に 苦笑しながら、見守っている。



「そんなことに なっているの。」

大丈夫なのかしら。

そこって 危険な場所なんでしょう?」「ハーマイオニーは、溜息をつきながら 呟いた。

少女の言葉に ロンは、肩をすくめてしまっているようだ。

「でも 大丈夫なんじゃない?

ハリーって 何気に 運がいいみたいだし。

去年だって……それを掻い潜って、クイレル先生に寄生していた

『あの人』を、倒したんでしよう?」「マリーベルは、おいしそうに クッキーを食べながら、呟く。

姉の言葉に アルデルトは、呆れたように 溜息をついてしまっている。

「不謹慎だよ?

もしかしたら ハリー 危ないかもしれないのに。

それに オリビアだって……」アルデルトは、心配そうな表情を浮かべて 呟いた。

その言葉に ロンとハーマイオニーも、不安を隠せない様子で 顔を見合わせてしまっているようだ。

一同は、ダイアゴン横丁で 合流を果たす。

ただ ハリーとオリビアがいないことに対して ハーマイオニーやウィルソン姉弟は、戸惑いを隠せないでいるようだ。事情を聞き 納得してくれていた。

先に 横丁へとやってきていた フレッドとジョージも 心配してしまっているようだったが 両親の話の聞き 安堵したようだ。

子供達の様子に 少し離れた場所にいる 大人達は 微笑ましそうな表情を浮かべている。

「でもさ?

そんな心配は、いらないよ。

オリビアは、ある意味 危険を幸運に 変えるから」

青年のその言葉に 一同は、不思議そうな表情を浮かべて 顔を見合わせた。

「だな？」

1年生の時から 友達やっているけど 本当に 不思議な事ばかりだし。

その運を面白がられて 監督生に、選ばれたらしいからな？

最初 本人は、乗り気じゃなかったらしいけど。

孤児院じゃ ちびっ子の世話していることもあって………面倒見がいいから」パーシーは、苦笑しながら 言う。

「オリビアは、孤児院の出身だったの？！

初めて聞いたわ？」ハーマイオニーは、目を大きく見開きながら 呟いているようだ。

「うーん……… 本人がいないところで 言うのも なんなんだけどさ？」

11年前 マグルの大通りで 大量殺人が起きたのを知っているかい？」

パーシーの言葉に ハーマイオニーは、”知ってるわ？”と 頷く。

「私の幼馴染のご両親も、その犠牲者だったから。

毎年 お花を供えに行っているけど……… 未だに 当時の惨状が、残っている箇所があるわ？」

「そういえば……… マグルのニュースでも、取り上げられていたんだっけね？」

犠牲者のほとんどは、マグルだったから」オリバーは、遠くを見上げる。

「あたしが、まだ 赤ん坊の時の事件？」

『例のあの人が滅んだ後 物騒な事件が、続いたと聞いたことがあるわ？』

ジニーは、真剣そのもの。

ハリーの前にいる時の落ち着きのない様子とは違い 落ち着きを払っているらしい。

「ああ……その犯人は、死喰い人<sup>デス・イーター</sup>だつたんだ。

ある夫婦を死に追い込んだ 魔法使いさ。

その男は、追い詰められて マグルの大通りで 近くにいた マグルを巻き込んで 虐殺した。

オリビアとその両親は、その場に居合わせていて……彼女は、何とか助かったんだけど ご両親は……」

それを聞いて ロン達は、息を呑んでいた。

「ねえ……その犯人は、どうなったの？」

ロンは、” 勿論 捕まったよね？” と 真剣な顔だ。

「犯人とされた 魔法使いは、アズカバンに投獄されているよ」

兄の発言に 弟達は、顔を見合わせる。

「アズカバンなら 大丈夫だよ。

あそこは、誰にも 脱獄できないんだから」

「ところで その死喰い人<sup>デス・イーター</sup>が、死に追い込んだ ある夫婦って？」

ハーマイオニーは、唾を飲み込みながら 呟いた。

栗毛の少女の質問に 他のメンバーも、ハツとしたようだ。

パーシーとオリバーは、齒切れが悪い。

「その夫婦っていうのは、ハリーの両親でしょう？」

アズカバンに投獄されているのは、シリウス・ブラック」ずっと

黙りっぱなしだった アルデルトが、言う。

ロン達は、それを聞いて 言葉が見つからない。

「彼は、私達の父親の従兄。

私達の大好きな従姉の父親よ」マリーベルは、溜息をつきながら呟いた。

「2人の親族が アズカバンに投獄されているっていう話は、聞いていたけど……まさか シリウス・ブラックだったなんてな。

ハリーが、聞いたら……厄介そうだ」

「いや……ハリーは、迷いさえするかもしれないけど それを理由に マリーやアルと仲違いは、しないと思うぞ？」

フレッドの言葉に ジョージは、真剣な顔だ。

「そうだな？」

ハリーは、人を見る目があるだろうから。

ちゃんと わかってくれるはずさ」パーシーは、眼鏡を押さえて言う。

その時 店の後ろから 爆発的な歓声が、聞こえてきた。

「な……………何?！」

一体 何があつたんだろ?」

ロンは、胸を押さえて 落ち着こうとしているようだ。

「サイン会みたいよ。」

ギロデロイ・ロックハートが、自分の著書の本にサインする催しな  
んですって。

その前に 予言新聞のインタビュー取材もあるみたいだけど」

声に反応して 振り返ってみると ウェーブの掛かった 驚色の髪  
の少女が、興味なさそうに 店の中の中央の山積の本の置かれてい  
る テーブルを指差す。

ハーマイオニーとジニーは、それを聞いて 嬉しそうな顔になる。

「あれ……………チィ？」

今日は、どうしたの？

ダイアゴン横丁に一緒に行くのか聞いたら……………人ごみは、嫌いだ  
から って 言ったじゃない」マリーベルは、呆れたように 呟い  
た。

どうやら 知り合いのようだ。

「手当て用の包帯が、足りなくなっちゃったんだけど……………サツキ  
達 手が離せなくてね？」

代わりに 買いに来たの。

前を通りかかったら……………アンタ達の姿が、見えたから」

少女は、苦笑すると ロン達に向き直る。

「一応 初めまして。」

チエミ・ミナモト……………スクイブよ。

マリーもアルも 遅くならないようにね？

何か  
ー

チエミは、ニッコリと微笑んで ”それじゃあねえ？”と手を振って 店を後にした。

入り口付近の黄色い声は、どんどん 大きくなり 人だかりが、出来始めているようだ。



ハリーは、ダイアゴン横丁に到着すると ウィーズリーの面々が待っている という 書店へと向かった。

ハグリットが、2人を見つけると すぐ アーサーに 知らせてくれているようだ。

書店の中では、ロンやウィーズリーの双子にパーシー オリバーとウィルソン姉弟がいる。

「良かった ハリー!!」

無事だったんだ…… オリビアもさ？

もしかして 危ない魔法使いに、捕まったりしていないか ってさ？」ロンは、嬉しそうな表情を浮かべて 眼鏡をかけた少年の方に、抱きながら 言った。

その言葉に ハリーは、照れくさそうな表情を浮かべてしまっているようだ、

「あら その言い方だと 私は、ついでのようなんだけど？

ロナルド少年 それは、どういう意味なのかしらね？」

何だか、年上に対する 言葉使いが、違っているような 気がするんだけど？」

オリビアは、呆れた表情を浮かべて 眼鏡を掛け直しながら、ロンに詰め寄っていく。

そんな少女の様子に ロンは、泣きそうな表情を浮かべてしまっているようだ。

「おいおい 人の弟を、泣かせるなよ？

自分だって 弟がいるんだから…… 僕の言いたいことは、わかるだろう？」パーシーは、溜息をつきながら 言う。

その言葉に オリバーも、赤毛の青年の隣で 苦笑してしまっていた。

オリビアは、そんな友人2人の様子に 肩をすくめてしまっているようだ。

「けど オリビアも、すごいわよね？」

だって……同じ場所に 飛ばされるとは、言えないのに「マリーベルは、苦笑しながら 言う。

姉の言葉に アルデルトも、感心したように 頷いているようだ。

「そうだよ……もしかしたら 変な連中に 連れて行かれちゃったかもしれないんじゃない？」

あそこでは、よく 魔法使いの子供が、攫われる事があったんでしよう？

もし そうなっちゃっていたら」

少年の言葉に 一同は、驚きを隠せない様子で 顔を見合わせた。

「確かに 闇の帝王が生きていた頃は、そんな事件が 多発していたらしいな？」

確か ここでは、なかったらしんだけど 闇の魔法使いに、攫われて 呪いを受けた 子供も、いたらしい」パーシーは、悲しそうな表情を浮かべて 呟く。

その言葉に 一同は、神妙な表情を浮かべて 顔を見合わせてしまっているようだ。

「ところで 他のみんなは？」

いくらなんでも、ハーマイオニーだって もう ダイアゴン横丁に着いているんでしょう？

もしかして 彼方達は、グレンジャー家と一緒に 来たの？」オリビアは、不思議そうな表情を浮かべて 呟いた。

「まあね？」

だって、僕達 ハーマイオニーの家の車で、連れてきてもらったし。何か 心配だったけど、安心したよね？」

アルデルトは、そう言いながら 苦笑しているようだ。

「本当に あの安全運転 誰かさんに 見習ってもらいたいわ？

どうして…… あんなに 暴走させちゃうのかが、わかんないんだ  
けど」マリーベルは、大きく溜息をつきながら 言った。

そんな双子の様子に ハリーは、不思議そうな表情を浮かべてしま  
っているようだ。

「ハーマイオニーだったら 外に群がってるよ」ロンは、落ち着き  
のない様子で 辺りを見回してしまっている、少年に 囁いた。

その言葉に ハリーは、不思議そうな表情を浮かべて 首を傾げて  
いる。

「今度の『闇の魔術に対する防衛術』の先生さ？

あのギロデロイ・ロックハートだったんだ。

今 あっちで サイン会をしているんだ。

それで ウィーズリーおばさんやハーマイオニーとジニーは、嬉し  
そうに その場に向かっている」オリバーは、苦笑を噛み締めなが  
ら 呟いた。

ロンは、その言葉に 少し、訝しげな表情を浮かべてしまっている  
ようだ。

そんな赤毛の少年の様子に ハリーは、不思議そうな表情を浮かべ  
て 首を傾げた。

「ママとジニーは、家にいる時から ファン魂を炸裂させているか  
らわかっていたことなんだけどさ？

意外なのは、ハーマイオニーだよ。

なんだって また 魔法使いの有名人に 熱を上げているんだか。  
ただのーハーじゃないか」ロンは、呆れ果てたように 呟いた。

「ハーマイオニーのご両親も 付いていつているみたいだよ？

何か 面白そうだから、ってね？

話していたら ハーマイオニーってば、面白いの。

勿論 両親もね？」マリーベルは、クスクスと笑いながら 言う。

何でも 車の中やダイアゴン横丁についてから、色々と会話を弾ま  
せていたらしい。

その話を聞き ハリーは、どこか 複雑そうな表情になった。  
少年の様子に 一同は、顔を見合わせて 不思議そうな表情を浮かべて、顔を見合わせてしまう。

ハリーの真意に気が付いたのか パーシーやオリバーとオリビアは、神妙な表情を浮かべて 顔を見合わせてしまっているようだ。

その時 背後から、少女の弾むような声が 聞こえてくる。

「ハリー！無事に 辿り着いたのね？！」

振り返ると ハーマイオニーが、栗色の髪を靡かせて 駆け寄って来た。

ジニーも、嬉しそうに本を抱きしめて 顔を赤らめているようだ。

その様子に ハリーは、苦笑しながらも ニツコリと微笑んでいる。

「本当に 良かったわ？」

事情は、手紙で 教えてもらったけど 大変だったんでしよう？

伯母夫婦に、閉じ込められて。

その上 私達の手紙を、屋敷しもべ妖精に 隠されてしまっていたんでしよう？」「ハーマイオニーは、訝しげな表情を浮かべて 言った。

「本当に 心配かけちゃったみたいだね？」

ハリーは、苦笑しながら ハーマイオニーを見つめ返している。

「まあ ロンなら とにかく ハリーからの返事が来なかったもの。やっぱり 心配したわ？」ハーマイオニーは、息をつきながら 呟いた。

赤毛の少年は、栗色の髪をした少女の言葉に 訝しげな表情を浮かべてしまっているようだ。

そんなロンの様子に 他のメンバーは、顔を見合わせて 吹き出していた。

グレンジャー夫婦は、娘の様子に 顔を見合わせてしまっているようだ。

「あら ハリーってば 眼鏡が 壊れちゃっているわ？  
それに 蜘蛛の巣も、髪についちゃっているようだし」

ハーマイオニーは、訝しげな表情を浮かべて ハリーの頭を、撫でた。

そして その仕草と一緒に 眼鏡を直してくれたようだ。

ロンは、そんな2人の様子に 目を見開きながら、ガタガタと 身体を震わせてしまう。

そんな赤毛の友人の反応に 一同は、不思議そうな表情を浮かべて 顔を見合わせる。

「気にするなよ。」

ロンってば 蜘蛛が大嫌いなんだ。

昔 大切にしていたぬいぐるみを、大蜘蛛にかえられちゃったものだから。

それ以来 蜘蛛と聞くだけで 泣きそうになるんだ」ジョージは、苦笑しながら 言った。

何でも その悪戯を実行したのは、フレッドらしい。

ロンは、恨めしがるように 双子の青年を、睨みつけている。

フレッドは、そんな視線に 笑いを噛み締めながら、弟をからかうような 仕草をしていた。

「だけど そんなにすごい人なの？」

ギロデロイ・ロックハートっていう魔法使いは。

今学期から ホグワーツで、先生になるんでしょう？

自分の書いた本を授業用に指定するだなんて 相当な自信家なんだね？」ハリーは、不思議そうな表情を浮かべて 言う。

そんな少年の様子に ハーマイオニーは、呆れたように 溜息をついてしまっているようだ。

「すごいだよ！」

だって あんな勇敢な人なのよ？

それに カッコイイし。

まあ パパの知り合いの人も、美男子な人がいるけどね？

ロックハートも、ハンサムなんですもの。

きつと 素敵な授業になるんでしょうね？何だか ワクワクしてき

ちゃった」

少女の言葉に ロンは、“やっぱ、ミーハーだ”と 悪態をつく。そんな赤毛の少年の様子に ハーマイオニーは、訝しげな表情を浮かべて 無言のまま、足を踏みつけた。

ロンは、その衝撃に 悲鳴を上げてしまい 一同は 気の毒そうな表情を浮かべて 顔を見合わせてしまっているようだ。

「ふん……随分と騒がしいと思ったら 君達だったのか」

直ぐ近くの階段の上から 嫌味を込めた 声が聞こえてきた。

一同が嫌そうな表情を浮かべて り返ってみると 予想通り 踏ん返り返った ドラコが扉の前に。

隣には、父親のルシウスも控えているようだ。

嫌味な少年の言葉に ジニーは、初めて “黙って”と ハリーの前で声を発す。

「何だ……ポッター？」

ウィルソンやグレンジャーだけじゃ 飽き足らず 新しいガールフレンドも出来たのか？」

その言葉に 赤毛の少女は、顔を真っ赤にさせてしまっている。

「最近の子供は、随分 場を弁えない輩が、増えてしまっているようだな？」

しかも ここ最近 マグルでも この町を自由に出入りするようになってしまったようだ」

ルシウスは、そう言いながら 皆を見回すと 鼻で笑う。

そんな男の反応に ウィーズリー兄弟は、訝しげな表情を浮かべてしまっていた。

男の見下すような視線を受けて 栗色の髪をした少女は、身震いしてしまっているようだ。

娘の様子に グレンジャー夫婦は、訝しげな表情を浮かべて ルシウスを睨みつけている。

「これは これは、マルフォイさんじゃありませんか？」

一体 何をお企みで？

このような場所は、貴方のような魔法使いの一族が嫌いでもないでしょうか？」

店の中の様子が気が付いたのか　アーサーが、難しい表情を浮かべて　入ってきた。

隣には、心配そうな表情を浮かべた　モリーが……。

その姿を確認して　ルシウスは、明らかに　嫌そうな表情を浮かべているようだ。

「ふん………確かに　言えているな？」

こんな俗に紛れた場所など」

ルシウスは、訝しげな表情を浮かべて　ロックハートの著書の本を、息子に手渡す。

本当は、来たくもなかったが　指定された本が、ここでしか売られていなかったため　訪れたらしい。

そして　モリーとジニーに視線を移すと　2人の前にある　大鍋の中から　本を引っ張り出した。

「ほお？」

やはり　兄弟の下がりを使っているのか。

ウィーズリー家も　大変だな？

後悔しているんじゃないか？

あの時の事を」

男の言葉に　モリーは、顔を真っ赤にさせて　“貴方には、関係ありませんッ！”と　叫んだ。

母の样に　ジニーは、心配そうな表情を浮かべてしまっている。

少女の样に　ルシウスは、本を鍋の中へと戻し　鼻で笑いながら

息子と一緒に　店を後にしていった。

「一体 どういう事なんだよ。

何か 意味わかんないし。

後悔 っ て どういう事なんだろう？

それに やたらと ママに突っかかっていたようだけどさ？

うちの事情なんて 関係ないはずなのに」

ロンは、訝しげな表情を浮かべて マルフォイ父子の、後姿を見つめていた。

ハリーやハーマイオニー、ウィルソン姉弟とオリバーとオリビアも意味が分らず、顔を見合わせてしまっているようだ。

そんな兄達の様子に ジニーは、心配そうな表情を浮かべて あたふたしてしまっている。

手に持った 大鍋の中身が、今にも 零れ落ちそうになってしまっていた。

他の兄達は、その辺の事情を知っているらしく 神妙な表情を浮かべて 顔を見合わせてしまっているようだ。

ウィーズリー夫婦やグレンジャー夫婦は、また 店の奥へと 消えていってしまった。

そんな大人達の様子を見送って 何か 事情を知っているらしいメンバーは、顔を見合わせるしかない。

「お前達は、知らないだろうけど 本当はさ？

ママとあのルシウスは、元々 婚約者同士だったんだ。

ホグワーツの卒業を待って 結婚が決まっていたらしいんだよ」パーシーは、訝しげな表情を浮かべて 呟く。

その言葉に そのことを知らなかった面々は、驚きを隠せない様子



で 顔を見合わせてしまった。

ウィーズリー兄妹に至っては ショックのあまり、顔を真っ青にさせてしまっているようだ。

「前に ビルとチャーリーが、その話をしていたのを聞いた時だったっけ？」

あの時は、僕らも同じような 反応をしていたな？」

フレッドとジョージは、そう言いながら 弟と妹の頭を、優しく撫でた。

「知らなかったのは、ロンとジニーだけだったのね？」

けど その話を聞くと あのルシウス・マルフォイの態度も、納得がいくわ？」

それに マルフォイ氏とおじ様が、仲が悪い っていうのも それが、関係しているんじゃない？」ハーマイオニーは、神妙な表情を浮かべて 呟いているようだ。

そんな少女の様子に ハリーは、戸惑いを隠せない様子で 奥で話し込んでいる、ウィーズリー夫人を、見つめる。

モリーの表情は、重々しいようで アーサーが、妻の顔色を 心配しているらしい。

「確か ホグワーツに在学中に パパとママが、付き合いだしたから 解消したんだっけ？」

いや 続いていた？」

親が勝手に 決めた 話だったんだろ？」

ママの実家は、元々 純血を重視しているわけじゃ、なかったらしいけど。

まあ 血の繋がりで親族間では、文句が言えない 立場だったらしいから」フレッドは、首を捻りながら 言う。

「確か…… 話が分つてもらえないから 卒業と同じ頃 駆け落ち結婚した って話は 聞いたけど？」

その時の友達に 協力してもらって。

ビルを産んだ後には、内輪だけでガーデンング結婚式…… 騙して

拉致られた っ て いうのが 話を聞いている限り、正しい気がするけど。

まあ 俺らが生まれた頃には、もう 実家の両親とは、和解していたからな。

その頃は、闇の時代って呼ばれていて……明日がないかもしれないって 不安がった恋人とかが、次々 結婚してたらしいんだけどさ？」

ジョージも、そう言いながら 肩をすくめてしまっているようだ。

「で……確か その後 ブラック家のナルシッサが、マルフォイと婚約したんだ。

それで ホグワーツ卒業後に すぐ 結婚して 子供が生まれた っ て わけだ」パーシーは、息をつきながら 言う。

ハリーとハーマイオニーは、その話を聞き 困惑を隠せない様子で 顔を見合わせていた。

ウィルソン姉弟やオリバーとオリビアは、その隣で 神妙な表情を浮かべて 顔を見合わせているようだ。

「そうだとしたら ただ 単に 嫉妬しているだけじゃない。

何だか マルフォイ夫人が、可哀想になってくるわね？

まあ ドラコのお母さん っ て いうのが、癪かもしれないけど」オリビアは、溜息をつきながら 呟いた。

少女の言葉に ウィーズリーの面々は、戸惑いを隠せない様子で 顔を見合わせてしまっているようだ

「そんなの僕 知らなかった。

っ ていうか……もし そうなっていたら あの男が、父親になっ ていたかもしれない っ てこと？！

そんなの絶対 嫌だッ！

ものすごく……やなんだけど」ロンは、泣きそうな表情を浮かべて 呟いた。

ジニーも 無言だが 震えてしまっているようだ。

そんな2人の様子に 一同は、戸惑いを隠せない様子で 顔を見合

わせてしまっていた。

「関係ないんじゃない？」

だって みんなは、ウィーズリーおじさんとウィーズリーおばさんの子供なんだから。1人でも欠けていたら みんな ここには、いない。

だから 人との出逢いは、すごいのよ」「マリーベルは、溜息をつきながら 呟く。

「そうだよ？」

みんな ここに いるでしょ？

だから 気にすることなんてないよ。

みんなが ホグワーツで出逢えたのは、偶然かもしれない。

だけど 何度も巡り合って……必然になって 運命になるんだよ」「アルデルトは、苦笑しながら 言った。

2人の姉弟の言葉に 一同は、驚いたように 顔を見合わせてしまっているようだ。

「それ……私も聞いた事が、あるな？」

人は、人生という名の 道を、歩んでいる って。

それに その道は、色々な別れ道があったり 落とし穴があつて 成長していく って。

他のたくさんの人の道と 繋がっていて 色々な出逢いがあるんだ って。

悲しい事も 嬉しい事も、ね？」オリビアは、遠くを見る様子で呟いた。

「お………久々に聞いたな？」

オリビアの その言葉」オリバーは、苦笑しながら 言う。

パーシーもその隣で 息をついているようだ。

「確か スリザリンの連中に、泣かされた後 何度も 自分で、言い聞かせていたんだっけ？」

2人の友人の言葉に オリビアは、頬を膨らませてしまっている。

そんな3人の様子に 他のメンバーは、顔を見合わせていたがす

ぐ  
苦笑しました。

「モリー………大丈夫かい？」

まさか こんな場所で あいつに 遭うとは、思わなかったが」

アーサーは、神妙な表情を浮かべて モリーの顔を覗きこんでいた。夫の言葉に モリーは、“大丈夫です”と 微笑んでいるようだ。顔は、真っ青になってしまっているようだ。

そんな魔女の様子に グレンジャー夫婦は、心配そうな表情を浮かべて 顔を見合わせてしまっているらしい。

「大丈夫ですか………奥さん？」

どこかで 休んだ方が。

足も ふらついてしまっているようですし」

グレンジャー夫人は、心配そうな表情を浮かべながら 赤毛の魔女の顔を、覗きこんできている。

隣に立っている グレンジャー氏も、困惑を隠せない様子だ。

「それにしても あの人は、本当に 怖いですね？」

あんな目で、見られてしまったら 本当に………」

夫の言葉に グレンジャー夫人は、訝しげな表情を浮かべている。

「あら ただ、見られただけで そんな調子なのなら 後々が 大変になってしまうわ？」

あの子達は、もっと 危険な事に 巻き込まれてしまうかもしれない。いと いうのに。

あの男、相変わらず とんでもない性格をしているのね？」

妻の言葉に 夫は、戸惑いを隠せない様子で 見守っていた。

そんな夫婦の様子に ウィーズリー夫妻は、不思議そうな表情を浮かべて 顔を見合わせているようだ。

「娘さんから 前学期の事を、お聞きになったのですね？」アーサーは、神妙な表情を浮かべて 言う。

隣のモリーも どこか、不安を隠せない様子で 答えを待っているようだ。

「ええ……聞きました。

おそらく 娘の書いた 手紙が届かなかった一件も 何かを、予言しての事なんでしょうね。

それでも 子供達は、立ち向かわないといけない」

妻の言葉に グレンジャー氏は、心配そうな表情を浮かべて 先ほどから、話し込んでいる 子供達に、視線を走らせた。

「不甲斐無いです。

ただ 魔法が使えない、というだけで 娘を守ることも、ままならないだなんて。

去年の事件について ハーマイオニーから聞いた時は、本当に驚きましたから。

あの時の事を、今更ながら 思い出しましたよ」

グレンジャー氏の言葉に アーサーとモリーは、顔を見合わせながら 難しい表情を浮かべている。

「大丈夫ですよ。

先ほども お話しましたように 魔法に関する 一件では、こちらで 娘さんをお守りします」アーサーは、真剣な表情を浮かべて言った。

夫の言葉に ウィーズリー夫人も、真面目な顔をしているようだ。

「確かに 魔法使いの家庭ですから……戸惑う事があるかもしれないが 彼女なら、大丈夫ですよ。

彼方方の 娘さんなんですから。ホグワーツでも 本当に、勉強家で 息子達も、褒めまわっていましたから」

モリーも、そう言いながら 微笑んだ。

「理解は出来ています。

私共は、確かに マグルかもしれませんが 事情は、察しているつもりですから。

姉の嫁ぎ先から 何かと 話は、聞いています」

グレンジャー氏は、ニツコリと笑みを浮かべる。

「そろそろ 家に戻らないと。

夕食の準備が、まだ 出来ていないわ？」

ふと グレンジャー夫人は、驚いたように 声を上げた。

夫人の様子に おそらく 魔法使い一家なのだろう人々は、苦笑してしまっているように 見える。

「そうか？」

君の場合は、準備しても 準備しなくても 味は 同じだろう？

前は、レンジを爆発させたて 結局 僕が作る事になる」グレンジャー氏は、小さく溜息をつきながら 言った。

夫の言葉に 夫人は、訝しげな表情を浮かべて 蹴りを入れる。

その攻撃に グレンジャー氏は、その場に 座り込んでしまっているようだ。

「確かに もう 買い物は終わりましたし 解散いたしますか？」

アーサーは、苦笑しながら 言う。

その声が、鶴の一声のように 子供達も、駆け寄ってきて 別れる事になる。

大人達は、また 世間話が出来るまでの時間まで。

子供達は、ホグワーツでの 再会まで。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4945p/>

---

ハリー・ポッターと邂逅(かいごう)

2011年1月21日07時17分発行